

## 相克相生と深奥幽玄——囲碁・棋史の情理と妙趣（1）

夏 剛 ・ 夏 冰

### 囲碁の2大黄金期・新紀元と起源の通説・異説

囲碁は天授の<sup>ボード・ゲーム</sup>盤上遊戯であり、究極の頭脳競技である。囲碁は数千年前から中国で発祥・普及し、朝鮮半島経由で日本に伝来した後は高度の発達を遂げ、江戸（1603～1868）・昭和（1926～89）時代に<sup>りゅうせい</sup>隆盛を呈し続けた。世界囲碁史上の2大黄金期を経て、日本1強体制下の<sup>アマチュア</sup>非専業・<sup>プロフェッショナル</sup>専業世界戦の創設（1979・88）に由って国際化時代に入り、更に中・韓両雄競合の最中の2016年に<sup>A</sup>囲碁人工<sup>I</sup>智能の驚異的な進化で新紀元が訪れた。

囲碁は深奥幽玄の技芸であり、囲碁史は相克相生の産物である。囲碁の発生地・誕生時期と発明者は、芸道の神秘性と歴史の悠久に相応しい様に、時間・空間・次元の<sup>とてつ</sup>途轍も無く<sup>じん</sup>甚大な<sup>けんかく</sup>懸隔に由って、到底突き止め得ない遥かな<sup>かなた</sup>彼方に在り、永遠の謎と為っている。

世界中の碁界内外の最大公約数的な共通認識として、「中国起源」の通説は<sup>もはや</sup>最早<sup>ひと</sup>定説に等しい。「上古」は中国語の「遠古」と同じ<sup>かなり</sup>可也の昔の意の他、日本史（特に日本文学史）の時代区分として文献を有する限りで最も古い時代を指すが、<sup>いにしえ</sup>遠い古の歴史の特定には文献や考古学の裏付けが欠かせない。碁の史上初の文献記載は『春秋左氏伝』「<sup>じょう</sup>襄公二十八年」（紀元前548）に見える史実であり、1998年に陝西省で出土された現存最古の碁具は前漢（西漢）時代（前202～後8）の碁盤である。人類の起源は新しい発見が<sup>たちま</sup>出れば忽ち時空の両面で大幅に書き換えられるが、中国起源説を覆す様な更に古い物的証拠は他国には出て来ない。

中国起源説は日本でも主流を為して来ており、囲碁王国の最盛期の権威有る文献から例を拾うと、林裕（囲碁研究家・<sup>ライター</sup>著述家、1922～86）編著『囲碁百科辞典』（金園社、1965）の「自序」に、「碁は遠い古代に中国で発生して以来、朝鮮を経て日本に伝えられた」と書いてある。小学館『日本大百科全書』（編集著作・出版者＝相賀徹夫〔第2代社長、1925～2008〕、本編24巻＋索引1巻、1984～89）の【碁】（執筆＝小堀啓爾〔囲碁著述家、1940～2003〕）の「歴史〔起源〕」の詳解でも、「発生地と時期についていくつかの仮説があるが、三千年ほど前、古代中国の先進地帯で碁の原形が形成されたとする説がもっとも有力である」としている。

韓国・中国の猛追で世界第3位へと転落した今世紀に於いても、中野謙二（1931～、東海大学教授、元毎日新聞社香港支局長・北京支局長・編集委員）著『囲碁 中国四千年の知恵』（創土社、2002）等の様に、日本では中国所産説は略不動の地位を保っている。小説家百田尚樹（1956～）は日本放送協会経営員会（最高意思決定機関）委員在任中の「南京大虐殺」（1937.12）否定発言（2014.2.3）<sup>1)</sup>に由って、中国外交部發言人（外務省報道官）洪磊（1969～）から国際正義・人類の良識への公然たる挑戦として糾弾され（2.5）、海外の民間識者として異例にも中国共産党中央委員会機関紙『人民日報』の3日連続の集中砲火を浴び<sup>2)</sup>、又「妄言」の誹りを顧みず「愛国論」鼓吹の「猛言」（激越な言説を表す造語〔本稿中「造語」と付記する表現は筆者に由る〕）を繰り返しているが、自国の誇る可き名棋士井上幻庵因碩（1798～1859）を描く長篇『幻庵』（上・下2巻、文藝春秋、2016）の「プロローグ」の中で、「囲碁は紀元前一〇〇〇年頃、中国で生まれたと言われている」、「囲碁は中国から朝鮮、さらに日本へと伝わった」と述べ、「エピローグ」の前の第八章「黒船来航」でも「囲碁の発祥の地である唐の国」と書き、極めて順当な歴史認識を示している。

他方、武宮正樹（1951～、77年九段）は人類初の世界プロチャンピオンと成る前年（87）に、『武宮正樹のふと気がつけば大宇宙——自然流の生き方に学ぶ』（ダイヤモンド社）の中で、「ご存知のように碁は中国から伝来したものです」や「本家中国」と書いた（第1章「自由に打ちたい」第2節「創造の喜び」）が、中国の世界王者量産・独占（全6大会決勝で6棋士が俱に初制覇）の2013年には、『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』（河出書房新社）の第4章「碁は神様からの贈り物」第1節「人知を超えたもの」の冒頭に、「碁の起源は中国ともチベットともインドとも言われていて、はっきりと確定されていないようです」と異説を併記している。『幻庵』の3日前（12.28）にダイヤモンド社より刊行した金沢盛栄（1951～）著『本因坊400年 手談見聞録』でも、非專業強豪（全日本学生本因坊決定戦4連覇、世界アマチュア囲碁選手権戦日本代表決定戦優勝3回）で、『毎日新聞』東京本社学芸部囲碁担当・編集委員を務める作者は、第1部分「囲碁の起源から日本棋院の設立まで」の「①囲碁のルーツ インドやチベット・ヒマラヤ説も」の中で、「中国発祥と言われる囲碁は奈良時代以前に日本に伝来」と述べる半面、「インドやチベット・ヒマラヤ伝來說もあり、起源は目下、不明としかいいようがない」と記す。日本棋院（1924年設立）の電腦網上情報蓄積地（中国語＝「網站」）の「囲碁の歴史」の紹介の現行版でも、第1節「囲碁の起源（紀元前2千年～前千年頃）」の冒頭で、「囲碁のはじまりは、四千年ぐらい前の中国と言われています。/ただ、中国ではなくインドやチベット発祥の異説もあり、はっきりしたことはわかっていません」（引用文に入れた斜線は改行を表す記号、以下同じ）と言う。日本碁界の総本山の見解として国内で中国起源説の「一本道」に取って代りつつあるが、認識・発想・立場の違いに由って中国の識者から激しい反撥が出た事は想定外であろう。

インターネット  
国際電脳網で上記の文章を入力して検索すると、発信源の日本棋院及び日本の碁界内外の引用・踏襲の他に、これを出典として和文の儘<sup>まま</sup>で注1に付けた中国語の論文が飛び出て来る。「2017 全国業余 (アマチュア) 棋王争覇賽 (戦)」の HP (中国語 = 「主頁」) の「棋文化」欄に転載されたこの文献 (15.11.20, 刃鋒集団官 方 網 站<sup>オフィシャル・ウェブ・サイト</sup>より) <sup>3)</sup> は、「駁“囲碁起源於印度説”」(「<sup>インド</sup>碁の印度起源説」を論破する)と題し、筆者の陳祖源 (1944~ ) は光学機器分野の高級工程師 (上級技師)・管理職を長年務め、定年後に古今の世界の碁碁規則に関する研究の著述を以て当該分野の国内第一人者と為り、第1回世界智力運動会<sup>ワールド・マインド・スポーツ・ゲームズ</sup> (08, 北京) の碁碁競技規則を制定した専門家である <sup>4)</sup>。彼は『碁碁規則新論』(〔成都〕蜀蓉棋芸出版社, 2000) で数理論理を基に碁碁規則の諸問題を詳解し、『碁碁規則演變史』(上海文化出版社, 07) で碁碁規則の進化・変容 (「演變」の両義) を回顧し、国際碁碁連盟 (1982 年設立) 認可の 08 年規則で日本・中国・台湾の 3 方式の融合を図った。『碁碁規則演變史』の第1章「碁碁之初」(碁碁の初め) に次ぐ第2章は「朝鮮碁碁和藏式碁碁」(朝鮮碁碁と西藏式碁碁<sup>チベット</sup>) で、第5章「走向分歧的碁碁規則」(分れて行く碁碁規則) で日・中規則の相異を掘り下げ、第7章「統一之路」(統一の道) で<sup>しょう</sup>応昌期 (台湾の実業家・碁碁規則研究家, 1917~97) 規則・米国規則に光を当てたが、碁碁の世界の多様性を説く彼も印度起源説には拒否反応を示している。

### 「生母」中国の裁断と「養母」日本の<sup>ほかし</sup>矚化

碁碁の印度起源説を斬る陳祖源論文に曰く、碁碁の起源が中国であるのは世界の碁碁界では共通認識<sup>ないし</sup>乃至常識と為っており、過去に西洋に有った日本起源の誤解も打ち消されている。附録で列挙され米国・英国・<sup>ドイツ</sup>独逸・<sup>イタリア</sup>伊太利の碁碁協会の HP の紹介は全て中国起源説を取り、権威有る『ブリタニカ百科事典』(英国) の中国語簡略版 (『不列顛百科全書』, 中国大百科全書出版社 [北京。以下同じ場合は首都所在の日本の出版社と同様に略す], 1986) でも紀元前 2356 年に中国で起ったと有り、中国の碁碁界ではこの問題に討論の余地が有ると意識は毛頭無い。ところが印度起源説が<sup>いつ</sup>何時の間にか目立たない形で浮上し、『ブリタニカ百科事典』中国語完全版 (全 20 巻, 1999) の記述も「公元前 2356 年起源於印度或中国」に修正され、2007 年修訂版でも同じく時の英語版に基づくその記述を維持したので、和文・英文の専門的な著述に見当たらない印度起源説は看過できなくなった、と言う。独自の調査の結果、「風源在日本」(風説の源頭は日本に在る) という推論が導かれ、真っ先に挙げられた根拠が日本棋院の上記の講釈である。文中の中国語訳の「碁碁的起源是在大約四千年前, 一般認為始於中国。雖然也有發祥地并非在中国, 而是在印度或西藏的不同説法, 但没有明確的根拠」(日本語に直せば、「碁碁の起源は約 4 千年前に在り, 中国に起ったと一般的に認識されている。發祥地は中国ではなく, 印度或いは<sup>チベット</sup>西藏に在るという異説も有るが, 明確な根拠が無い」の意) は、原文と若干違うの

で「駁」(反駁, 弁駁)の論拠と結論に微妙な影響を与えている。

陳祖源は日本の碁界では中国起源説には従来異論が無いと言い切り、中国で能く引用される江戸時代の通説を引き合いに出している。それは享保12年(1727)に「四大棋家掌門人」(碁院四家の家元)が調印した「合約」(合意書)で、行動規範の性質を持つ「合約」は「囲碁創自堯舜, 由吉備公伝来」で始まると書いたが、本因坊(五世[1702~27])道知(本姓神谷, 1690~1727, 20年八段準名人, 21年名人碁所就任)・井上(家四世[1719~34]策雲)因碩(本姓三崎, 1672~1735, 21年八段準名人)・安井(家四世[1700~37])仙角(1673~1737, 21年八段準名人)・林(家四世[1706~26])門入(本名片岡因的, 跡目時代より林因竹, 隠居後号朴入, 1670~1740, 21年八段準名人)連名の当該文書は、『囲碁百科辞典』の「5. 歴史辞典」の中の【碁将棋方事蹟の取調】の詳説の通り、江戸幕府第8代(1716~45)将軍徳川吉宗(初名頼方, 1684~1751)の命に由り碁の由来を申し述べる調書で、四家協議の上松久寺住職込山忠左衛門(生歿年未詳)が起草し四世林門入が浄書し本因坊道知が提出したものである。件の文言が入った最初の段落は、「一囲碁の始は堯舜に起り、吉備公帰朝の節より伝来本朝に流布仕候由承及候。尤夫より先きに相渡候様にも申伝候得共、慥の儀は不奉存候。囲碁の法古今同体相違無御座候。其段玄々碁経並に其外の書等に相見申候」と為る。堯舜に起り吉備より伝来という枕詞は陳の主張通り当時の碁界の固着認識(「固着観念」「共通認識」を合成した造語)と言えるが、伝来の時期に就いての異説併記や「囲碁の法古今同体」の考えにも注目したい。

その前年に碁院四家は現住所の調査(同年から6年目毎に1度行う戸口調査の一環)を受け、後に四家共同調書を清書した林家四世の隠居、五世(1727~43)門入因長(本名井家道蔵, 1690~1745, 35年八段準名人)の家督相続もこの年の世代交代である。100年後の1826年に、本因坊家の跡目丈和六段(本姓戸谷, 後に葛野, 幼名松之助, 1787~1847, 27年十二世襲位, 28年八段, 39年引退)著『石立擲碁国技観光』が刊行されたが、4巻から成る打碁集([大阪]方圓書房)の序(「江戸 節齋平岩章撰」)に「昔者吉備公入唐傳此技」と有り、昭和の幕開けの100年前にも吉備導入説の定石が廃れていなかった事を現している。奈良時代(710~84)の官人・文人吉備真備(本姓下道, 695~775)は遣唐留学生として、717~35年に中国で経書・史書・天文学・音楽・兵学等を幅広く学び、帰朝後に多くの典籍や天文曆書・日時計・音楽書・楽器・弓・箭等を献上した。中国で碁の名手と為り日本に碁を持ち帰ったという伝説は20世紀以降通用しなくなり、『世界大百科事典』改訂新版(編集長=加藤周一[評論家, 1919~2008], 本編30巻+索引1巻+地図帳2巻, 平凡社, 2007)の【碁】(執筆=林裕)の【歴史】では、「起源については諸説があり、易より発したとするもの、天文曆法をかたどったとするもの、計算具の変形とするものなどがあるが、いずれも想像の域を出ない。しかし中国の歴史時代以前からすでに行われていたらしく、伝説に堯の創始とするものがある」と述べた上で、吉備真備導入説は「明らかに誤伝である」と断じ、「おそらく6世紀の半ば、朝鮮半島を経て

仏教が伝来したころ、もろもろの文物とともに渡来したものと思われる」という見解を示した。『日本大百科全書』の「日本へはおそらく五、六世紀、朝鮮半島を経由して伝わったものと推測できる」は更に前の時代に遡るが、陳祖源は吉備以前の囲碁伝来の有無を巡る論争が有ろうが、地の多少を争う(中国語＝「比空」[空き地の多少を比べる])現行の日本囲碁は、間違い無く唐朝(618～907)に遣唐使に由って日本に持ち帰られたものだと考える。又20世紀の日本碁界で能く言われた「中国は囲碁の生母、日本は囲碁の養母」を引いて、この表現も囲碁が中国で起ったのは日本に於いても自明である事を物語っていると言う。

次に前出の日本棋院の記述を槍玉に上げて、「中国に起った」に「一般的に認識されている」と付けて表現を弱くした上で、中国(起源説)を否定する印度・西藏チベットを加え、更に「明確な根拠が無い」の一言で和らげるのは可笑しいと述べる。異説の明確な根拠が無いなら何故持ち出すのか、風説に過ぎない異説を敢えて書き記すのは下心が有る嫌がらせではないか、と糾弾する。この様な分析は「誅心」(企みを暴く)の嫌いが有るかも知れないが、仮令疑問付きの形でも印度起源説を「網 站」ウェブ・サイトに載せた事は、少なくとも日本に於けるこの説の影響力・認知度や風説が日本に起った事を現している、と推論を展開する。客観的に見れば日本語及び日本的な発想への理解が不足で、些か独断的過ぎて一種の邪推の様にも受け止められる。「一般的に認識されている」と認識された「～と言われている」は、上記の【碁・歴史】の中の「～と思われる」と同様に、表現や判断の主体を臍化ぼかす日本的な言い回しとして極めて一般的であるし、但し書き風の異説併記も断定調を避け他の可能性を排除しない慎重さの現れと捉え得る。武宮正樹は『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』第2章「日本の碁」を考える」の第6節「日本の碁とは？」の中で、「韓国や中国の碁は、研究し尽されているので“この定石はどちらが有利」といった具合に、すべてが具体的で実戦的です。答えが出てしまっているというか、無理やりにでも答えを出そうとしている——これが韓国や中国の棋士の、碁に対する基本姿勢です。/翻って日本の碁は“曖昧”です」と語っている。第3章「棋士のセンスと人間性」の第6節「呉清源」で「昭和の棋聖」と称す呉(1914～2014、50年九段推挙)に就いて、「現在も碁への情熱は衰えることなく、打ち碁の講評や研究など、積極的に活動をしておられますが、先生のお言葉は常に言い切っていますよね。(中略)やはり、今なお自分の碁に自信を持っておられる証拠です」と称える。目に見えないものに価値を見出す日本の碁の曖昧さは韓・中に無い素晴らしさが有ると主張し、言葉に力みなぎが漲った巨匠の自信の持ち様に清すが清すがしさ・美しさを感じるという趣旨であるが、日本棋院の囲碁起源説に対する中国の研究家の不満には碁にも映る国民性の違いが窺える。呉清源も日本棋院所属・日本国籍取得それぞれを其其2度経験したにも拘らず中国的な心性を変えず、『呉清源回想録 以文会友』(白水社、1984)第8章「以文会友」第1節「日中囲碁交流」の冒頭で、「囲碁の発祥地は、いうまでもなく中国である」と断言し異説を許容しない態度を見せた。

## 越境対戦に見る国民性・異文化の懸隔・衝突

日本への伝来の時期に対する両百科事典の推測の冒頭に有る「おそらく」は、中国語で「恐怕」（「怕」は「恐れる」「心配する」「恐らく」等の意）或いは「或恐」と言うが、起源の諸説併記は**不完全を恐れる故の無難な選択**と言えなくもない。日本流の天気予報は「明日は曇りで雨の降る処が有るでしょう」と言う風に、**外れた場合の予防線が推量形を以て張ってあるので安全性が高い**。中国流の「明天陰，局部地区有雨」は発布者の**自信・責任感を前面に出す断定形**と為り、林海峰（1942～，67年九段）に対する呉清源の「**割り切り力**」（造語）**重視の育成**が連想される。文壇囲碁基本因坊経験者の**報道人・作家**<sup>ジャーナリスト</sup>三好徹（本名河上雄三，1931～）は、『五人の棋士』（講談社，1975）第4篇「勝負師の沈黙——林海峰」（初出＝『小説サンデー毎日』73年6月号）で、「呉の教育法の特徴は、何よりもその明快さにあった。三百六十一路の盤面において、ことに布石から中盤にかけてのころは、着手は何通りもある。そういう場合、善悪の明白な手は問題外として、専門家といえども、迷うものである。呉は、それを明快に裁断した。林にとっては、それが何よりも優れた指導であった。迷いがなくなるということは、碁に対する自信と感覚を養うことにもなる」と書いた。同じ中国大陸出身の林は10歳時に台湾訪問中の呉に才能を見出されて来日し、藤田梧郎五段（1902～94，90年七段，歿後八段追贈）門下時代の1955年に入段し60年に師匠と共に六段に昇った。日本棋院関西総本部から東京本院に移った（1961）後65年に史上最年少（当時）で名人位を獲ったが、この間の飛躍には呉の初めての弟子と為り棋譜講評の通信教育を受けた恩恵が大きい。瀬越憲作（1889～1972，42年八段推挙，55年引退・名誉九段贈位）著『囲碁百年1 先番必勝を求めて』（平凡社，1968）に、「現代の中国は日本の碁が逆輸入されて互先置石制は廃止され、ついに呉清源，林海峰を出すに至ったことは周知の通りである」と有る。序章「囲碁略史」の「1 碁の起源・iii 中国における碁の発展」の中で挙げられた2人は、碁界長老の瀬越の弟子・孫弟子として**日本で大成したが中国人の思考・行動様式を貫き，両国の古来の「懸命流」（造語）からの脱皮や現代の「賢明流」（同）の確立に大きく寄与した**。

『現代囲碁大系』（編集主幹＝林裕，全47巻＋別巻1冊，1980～84）第24巻『杉内雅男』（本人解説〔以下，例外の場合のみ記す〕，小堀啓爾執筆，1981）の巻末論考「杉内雅男 碁一筋の道」（本巻執筆者，以下同じ）第5節「杉内の碁と囲碁観」に、昭和の代表的な棋士の呉清源・坂田栄男（1920～2010，55年九段）・藤沢秀行（本名保，1925～2009，63年九段）に対する評が有る。杉内（1920～2017，59年九段）は呉を昭和囲碁界の最も優れた才能の1人とした上で、「天性の棋才だけが強調され過ぎて、精神面，碁に対する心構えが指摘されないのは片手落ちではないか。究極には坂田栄男にも共通する執念を，呉は持っている。ねばり強く，勝負を投

げない。逆転の可能性を少しでも残しておく。同じ中国人である弟子の林海峯と、二枚腰という点で共通している。奇異に聞こえるが、呉清源はまれに見る勝負師なのである。碁は形にとられない。着手の自由奔放さ、融通無碍こそ注目に値する。局面局面における、未来の沃野がもっとも広い。」武宮正樹は『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』第2章第2節「徹底した競争システム」の中で、中国と並んで世界碁界の両横綱を為し日本をNo.3に追い遣った韓国の棋士の勝負強さを、「絶対に負けない」「最後には自分が勝つ!」という勝利への凄まじい執念に帰着し、彼等は例外無くこうだから韓国囲碁界延いては韓国の国民性の問題なのであると見る。結果至上主義の中の競争に於いては中国の方がより過酷だという断言は過去にも適用し、『現代囲碁大系』第5巻『岩本薫』(高橋敬光執筆, 1981)第21局(打込十番碁第5局, 48.10.19~21, 本因坊薫和八段[先番]対呉八段, 265手完, 白8目勝ち)の解説「明暗の局」に、岩本(1902~98, 67年九段)は呉の強さの要因の1つに気迫の鋭さを挙げている。「勝負所に差しかかると、裂帛の気合いと共に石を打ちおろしてくる。それが仮に無理手であってもである。呉さんほどの高手が見損じするはずがないという気迷いから、いわゆる気合い負けで、不本意な敗局が多かった」と語る。彼は打込十番碁(1948.7.7~49.2.24)の第6局までで呉の5勝1敗で一段下の先相先に打ち込まれ、最終的に2勝7敗1持碁の不成績で時の絶対覇者との大差を見せ付けられたが、敗戦の体験に基づく呉清源評は棋士の対抗に国民性・異文化の衝突が有り得る事を示唆する。

三好徹は「勝負師の沈黙——林海峰」の中で名人戦初奪冠の直前・直後の様子を克明に記し、名人位は手の届く処まで来ており奇跡の逆転は有り得ないのに、林は禅語の「心ハ万界ヲ脱シテ不動」の如く表情・動作に躍った処は全く無く、23歳の青年だとは到底思えない落ち着きぶりに呆れるほど感嘆したと言う。「石も名人も、みんな取られちゃった……」「だらしな碁を!」と悲痛に呻く坂田栄男と対照的に、勝負が終わった後も無言で相変らず海の様を広々とした表情の儘で駄目を詰め始め、立会人に由る林の勝利が宣せられても相好は崩れなかった。「来日以来十三年、さまざまな感慨が胸中を浮き沈みしているにちがいないのだが、外見からはうかがい得なかった。」囲碁に限らず他の盤上遊戯や身体競技でも敗者への配慮が礼法として求められており、日本でも中国でも囲碁棋士は勝った時に相手の前で喜びを抑える振る舞い方を心得ている。日本の国技と為る相撲では2009年1月場所の優勝決定戦に於いて、同じ蒙古出身の第69代横綱(07.7~ )の白鵬翔(本名ムンフバティーン・ダワージャルガル, 1985~ )を下し復活優勝を遂げた第68代横綱(03.3~10.1)の朝青龍明德(本名ドルゴルステンギーン・ダグワドルジ, 1980~ )が、勝利の直後に土俵で成功誇示の手振りをした事で、横綱審議委員会等で問題視され日本相撲協会(25年設立)から所属部屋の親方を通じて嚴重注意が為されたが、囲碁の「外国人横綱」と成った林や朝青龍と同年齢の弟子張栩(台湾出身, 03年九段)は、この様な不作法の真似をしないばかりか日本人棋士以上に模範的である。橋

本昌二（1935～2009, 58年関西棋院九段）は張栩の生年に2度目のNHK杯優勝をした時に感涙を溢し、その光景に感動した小林光一（1952～, 79年九段）も昌二の49歳の誕生日（84.4.18）に、加藤正夫（1947～2004, 78年九段推挙）から十段位を奪い選手権戦で8年ぶり・2度目の戴冠を決めた時に一座の中で泣いたが、林は勝利が決定した瞬間にも無意識の発露すら無いから45歳・31歳の両者を上回っている。「そこまで見事に自己制御できるものなのか、あるいは、われわれとは違った何かを生れながらにしてこの若い中国人の棋士は持っているのだろうか」と三好は訝る余り問いを掛けた。

### 碁界の歴史の基軸を為す棋士の「彼の物語」

武宮正樹は初のプロ世界戦と為る世界囲碁選手権・富士通杯の第1・2回で連覇した（1988・89）後、第3回（90）の2回戦（1回戦は種子）で韓国の李昌鎬四段（1975～, 96年九段推挙）に負けた。24歳年下の新鋭の金星は22歳年上の坂田栄男に対する林海峰八段の名人奪冠を彷彿させるが、武宮の同棋戦での武運は第1・2回準優勝の林が3度目の正直を果たした今回から続かず、次の3回（1991～93）でも悉く中国の若手に阻まれて初戦を落した。最初の相手の馬晓春（1964～, 83年九段 [4人目]）は藤沢秀行が世界No.2の碁才の持主と推し、次の劉小光（1960～, 88年九段）は日本でも少ない趙治勲（1956～, 81年九段）と互角に近く戦える実力者として秀行に絶賛されたが、最後の楊暉（1963～, 91年八段）は同棋戦史上初の女性棋士の出場で快挙を遂げた。第1回の初戦で下したその夫の曹大元（1962～, 86年九段 [5人目]）ならともかく、段位が下の女流に屈するのは少なくとも中国の男性棋士には耐え難い恥辱である。世界戦第2号の応昌期杯（通称「応氏杯」）世界プロ囲碁選手権（中国語表記＝「～職業囲碁錦標賽」）の第1期（1988～89）の初戦で、武宮は中国碁界の「抗日英雄」江铸久（1962～, 87年九段）に負かされたが、韓国勢に強い江夫人芮迺偉（1962～, 88年九段 [女性の世界初]）は、夏季五輪開催年に行う「囲碁五輪」の応氏杯の第2回で李昌鎬六段等を連破し4強入りした。女性棋士の世界戦最良績（造語）記録を作った芮の決勝進出は大竹英雄（1942～, 70年九段）に止められたが、大竹は第5回富士通杯優勝の次期に2回戦で華学明（1962～, 93年六段）に破られた。武宮にとって相性が良くない中国勢の擡頭はこの紅一点の8強入りにも現れたが、この番狂わせが起きた1994年は日本の3年連続世界戦無冠の起点と為った。武宮は1989～92年に準世界戦（造語）のテレビ囲碁アジア選手権戦の第1～4回で連覇したが、第4・5回の依田紀基（1966～, 93年九段）・大竹優勝の後に日本の制覇は暫く止った。終戦50周年に囁かれ始めた日本の「第2の敗戦」は経済・外交の他に囲碁にも見られ、バブル経済崩壊（1991）後の「失われた20年」を映す様に日本の世界戦優勝総数は94年に韓国に5-7で抜かれ、2006～17年の連続12年無冠の間



の09年に中国に11回対13回で逆転された。

英語のhistory(歴史)はラテン語の*historia*、ギリシア語の*historía*(調査で得た知識。過去を知ること)が語源で、由来に有る*hístōr*(歴史[知っている人、又は分っている人])とstory(物語)の複合(『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』[小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編, 1994]に拠る)も興味深いが、碁界の歴史(history)は男性・傑物中心の故に「彼の物語」(his story)である事が多い。主として棋士の相克から成る棋史は常に強豪の競合が基軸と見所を為し、1人のhero(英雄。人気者。立役者)の登場によって行方が大きく変わるものである。世界囲碁史上の第1黄金期と為る江戸の名棋士から歴史の創造者を1人だけを挙げるなら、四世本因坊道策(本姓山崎, 幼名三次郎, 1645~1702, 77年襲位・名人碁所就任)を置いて他無い。「前聖」の彼に対する「後聖」の十二世本因坊丈和・十四世本因坊跡目秀策(俗姓桑原, 幼名虎次郎, 1829~62, 48年襲位・六段)は、其其の時代の頂点を極めたものの250年余り中の最高峰の道策には少し及ばない。道策は手割等の新思考・新手法や均衡重視の大局観・合理性を導入した近代囲碁の祖であり、時の一流陣を悉く先以下に打ち込み「棋力十三段」と称揚された前近代最強の名手である。第2の黄金期の昭和の至高の偉人は「第4の棋聖」「碁神」の誉れ高い呉清源に他ならず、彼は1933年に同じ五段時代の木谷實(1909~75, 56年九段)と共に新布石革命を引き起し、10回の打十番碁(39~56)で1回の負け越しと1回の勝ち越し寸前の打ち掛けを除いて、2人の本因坊と自分以外の唯一の九段を含む7人の頂上級棋士を一段下の先に打ち込み、日本棋院の大手合に由る昇段制の九段第1号(49)の藤沢庫之助(後に朋斎, 1919~92)を二段下の先相先まで打ち込んだ。

江戸の碁の土台は直前に中国伝来の互先置石制を自由着手制に変えた碁史上第1の革命で、昭和の碁の起爆剤は中国から迎えた大天才の大活躍にも由る現代最大級の進化である。呉清源は中国の伝統的な力碁を骨格とし秀策の打碁集の勉強が血と為り肉と為ったが、弱体化した老大国で頭角を現した彼は瀬越憲作の誘致で修業先の日本に来た時(1928.10)、二十一世本因坊・名人(1908・14~38)秀哉(本名田村保寿, 1874~1940)等の要人が東京駅で出迎えた。年齒僅かに14で入段前の異国の神童に対する空前絶後の礼遇は日本碁界の懐の深さの証で、「囲碁国際化の祖」瀬越の「彼の物語」を紡ぎ出す先見性と行動力が新しい歴史を創った。呉は数千年の伝統を持つ発祥国と数百年の最盛を誇る王国の複合的な産物として、20~21世紀の囲碁の国際色や年齢的な意味も含む下剋上の趨勢を強めた。秀哉対呉五段(先)の最後の名人勝負碁(1933.10.16~34.1.29, 252手完, 白2目勝ち)は、新旧世代の激突と共に「日支(華)対決」の謳い文句の通り国際戦の祖形でもある。中山典之(1932~2010, 92年六段, 追贈七段)は、『昭和囲碁風雲録』(上・下2巻, 岩波書店, 2003)の27章の中で1章を割いて、「史上第一の有名局——本因坊秀哉対呉清源」(第8章の題)を詳述しているが、秀哉の名人引退碁(38.6.26~12.4, 237手完, 木谷實七段先番5目勝ち)も知名度が高い。30年後に日本人初のノー

ベル文学賞（1901年創設）受賞の栄光を浴びた小説家川端康成（1899～1972）は、観戦記（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』7.23～12.29 所載）と実録文学『名人』（決定版＝『呉清源棋談・名人』[文藝春秋新社，54]）等で、末代の世襲制本因坊をhero（小説・物語・戯曲等の男の主人公）として本局を語り継いだ。世界文学の桂冠を得た作家に烏鷺の争いを題材とする実録小説が有る事は今後望めなく、日本の囲碁文化の厚味を示すこの名作も彼の著名局の不朽の名声を高めている。新布石革命の両旗手と戦う名人勝負碁・名人引退碁の50年後の1983年・88年に、26歳の趙治勲が57歳の藤沢秀行の棋聖6連覇（ビリオド）を打ち、2つの世界戦が創設され以後の世界戦で日本人同士が決勝を争う場面は1回も無い。1930年代の国際化・実力制の発端に関った呉・木谷が一線から遠退いた65年に林海峰が名人位に就き、昭和～平成の交の碁界の頂点と世界戦の日本代表優勝者は略この2人の門下で固まった。木谷門下に由る7大選手権独占の1985～88年の間に武宮正樹が初代世界王者と成ったが、日本の世界戦奪冠の11回の中で強豪集中の傾向を現して両超名門の棋士は8回も占める。最後（第9回LG杯朝鮮日報棋王戦，2005）の張栩（1980～，03年九段）は呉の孫弟子で、師匠の林や優勝2回の趙治勲・王立誠（1958～，88年九段）と合せて「外人棋客」は過半数の6回が有り、呉清源時代にも増した「多国籍軍」に対する碁界の活用力を思わせる。

### 「懸命流→賢明流」の転換と国際化時代の到来

江戸の「前聖・後聖」に倣って昭和の「碁聖」1人と「亜聖」2人を推すなら、技量・実績の両面で杉内雅男が挙げた呉清源と坂田栄男・藤沢秀行が思い当たる。実力制名人・本因坊第1号の坂田も初代名人・棋聖（6連覇）の藤沢も内外の尊崇を得ており、柯潔（1997～，第2回百靈愛透杯世界囲碁公開戦優勝に由り2015年四段から九段〔40人目〕に飛び級昇進）は、世界序列1位（15.11～17.12）に成った後も最も影響を受けた日本人棋士として2人を挙げた。1988年に中国初の「棋聖」名誉称号に輝いた聶衛平（1952～，82年九段〔初代3人中序列1位〕）は、『我的囲碁之路』（我が囲碁の道。薛至誠整理〔構成〕，蜀蓉棋芸出版社，87）の中で、呉・坂田・秀行を「敬服する棋士たち」（第18章の題）としており、日本史上初の7冠同時制覇を2016・17年に2度達成した井山裕太（1989～，名人位獲得に由り09年九段）も、「井山九段が本当に尊敬する3人の棋士」（『NHK囲碁講座』14年2月号）で呉・秀行・坂田を挙げている。坂田は1983年にNECカップ囲碁トーナメント戦で最後（64個目）の選手権を獲得し、藤沢は同年の棋聖失冠後91・92年の王座位復帰・連覇で選手権防衛の史上最高齢記録（67歳）を作ったが、3大棋戦に限って言えば大正世代の古豪群は最後の砦を為す秀行の退場で頂上から降りた。

最初の国際試合と為る本因坊秀哉対呉清源の最後の名人勝負碁から30年経った1963年，坂  
54（572）

田栄男は第2期旧名人戦挑戦で藤沢秀行を破って選手権制初の名人・本因坊に成った。20年後の秀行の棋聖失冠と趙治勲の奪位（造語）・史上初の<sup>大3冠</sup>独占に由って、戦後生れ世代が第一走者集団の主体を為し呉清源・林海峰に次ぐ外国人覇者が誕生した。10年後に日本の世界戦無冠時代が始まったのは国際競争の激化の結果であるが、平成初頭以降の暗転・下落は昭和の大半に亘った栄光・上昇を際立たせた様に映る。武宮正樹は『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』第2章第5節「日本碁界の現状」の中で、昭和期前半の様な活況を取り戻す為には世界の舞台で結果を出す事が必須条件と為って来ると語ったが、昭和～平成の交に世界戦で登頂した彼と林・趙・大竹英雄は昭和の後期に<sup>碁</sup>舞台に上がり、終戦までの前期と坂田・林争覇までの中期より後期の碁・碁界は空前の発達・繁盛を呈した。前期以来の活況に拍車を掛けて囲碁黄金期を彩る大棋士・名勝負・絶妙手が続出し、囲碁人口も7大棋戦体制発足（1976）後間も無く1千万の大台に乗った。『現代囲碁大系』第37巻『石田芳夫 上』（山本有光執筆、1980）の「序」には、「スポーツや他のゲームごとと違って、将棋と同様どちらかといえば理屈っぽく取っつき難い囲碁に、一千万とも二千万人ともいわれる愛好家がいることは喜ばしい限りです」と当時の碁界の発展・隆盛が記してある。終戦3周年の日（1948.8.15）に生れた当人（二十四世本因坊〔71～75年5連覇〕秀芳、73年九段推挙）は、自分は不思議に戦後経済の高度成長と軌を一にするかの様に棋力が向上したと回顧するが、持続的な棋戦繁盛も日本主導の初の<sup>アマ</sup>・<sup>プロ</sup>世界戦の創設も昭和後期の活気・優位の賜物である。世界戦の開催を<sup>しるし</sup>徴とする本格的な国際化時代の<sup>へき</sup>劈頭から韓国が日本と比肩し始めたのは、後進の者に立たれる宿命を持つ先達の巨人の肩の高さを物語っている。

『昭和囲碁風雲録』第26章「昭和から平成へ」第1節「星霜移り人は去る」に、「昭和の囲碁史を回顧する時、多くの巨星、新星が現われ、去った。本因坊秀哉、木谷実、呉清源、高川格、坂田栄男、藤沢秀行、林海峰、石田芳夫、大竹英雄、加藤正夫、武宮正樹、趙治勲、小林光一。いずれもその個性豊かな碁は後世に伝えられる」と有る。秀哉・木谷・呉に次ぐ高川格（1915～86、60年九段）は二十二世本因坊（52～60年9連覇）秀格で、林に次ぐ木谷門下6人衆は大3冠初獲得順と符合して石田が1番目に出て、75年に名人位を奪った大竹、77年に本因坊と成った加藤（<sup>けんせい</sup>雅号<sup>けんせい</sup>劔正）、80年7月に本因坊戦で戴冠した武宮（<sup>しゅうじゅ</sup>雅号<sup>しゅうじゅ</sup>秀樹・〔2期目以降〕<sup>せいじゅ</sup>正樹）、同年11月に名人位に就いた趙、82年に本因坊位挑戦に成功した小林が続く。昭和初期の第一人者の秀哉と新布石革命の旗手の木谷・呉に次ぐ高川は1時代を<sup>かく</sup>劃し、その「流水不争先」（流水先を争わず）の「平明流」と計算に力点を置く棋風は、「避戦派」の林や異称「<sup>コンピュータ</sup>電脳」の石田とも通じ「懸命流→賢明流」の趨勢転換を促した。次の木谷道場の塾頭格は棋形・厚味と対局態度の潔さを重んじる「大竹美学」に由って、中国では自国の实用志向・効率主義・執念堅持とは対極的な日本の碁の代表と見做される。加藤は選手権連続保持の日本碁界最長記録（1976.5～90.11）を遺し、力<sup>ず</sup>尽くで<sup>たいせき</sup>大石を仕留める「殺し屋」の英名は中国で「天

殺星」と為って轟とどろいている。武宮は中央に模様を築く壮大な「宇宙流」と行雲流水の「自然流」棋風が名高く、初代世界王者の名声と純真・闊達な人柄も加えて内外の碁界で評判・人気が高い。趙は史上初の大7冠全制覇体験達成・選手権獲得数歴代1位（74回）等の大記録を持ち、坂田に勝るとも劣らぬ貪欲な上昇志向と頑強な戦闘精神が棋史の伝説を為している。小林は呉清源の得意な隙が無い勝ち切る力を以て中国の棋士に難敵中の難敵とされ、1980～90年代の日本碁界は彼と最好敵手の趙の競争が最大の主眼であったと言って可い。

中山典之が挙げた13人の昭和の代表棋士は中国の碁界でも尊敬・学習の対象と為るが、日本に無い分類として1980年代の優勝戦線で活躍した「六超」（6人の超一流）が有る。その林海峰・大竹英雄・加藤正夫・武宮正樹・小林光一・趙治勲は上記の13人にも入るが、年齢順で並べる処には日本と通じ合う東洋の礼義の邦の老幼の序に対する重視が窺える。『現代囲碁大系』の「監修 橋本宇太郎/呉清源/高川格/藤沢朋斎/坂田栄男/藤沢秀行/林海峰/大竹英雄」も然りしかで、日本棋院主導の昭和棋士打碁選集叢書シリーズの監修陣の中で関西棋院の総帥が最初に出るのは、本因坊3期（1943・50～51、雅号昭宇）の実績よりも最年長（1907～94、54年九段）の為であろう。秀行は朋斎の叔父（父親は朋斎の祖父）に当り中国流で言う「輩分」（世代）が上と為るが、甥より6歳若い故に5歳年上の坂田の前年に生れた朋斎の方が先に出るわけである。秀行より17歳年下の林・大竹は同年同月の生れで呉の命名に由る「竹林」と並称される（呉を名付け親とした説は三好徹「勝負師の沈黙——林海峰」に見える）が、熟称（「熟語・通称」を合成した造語）と逆の配置は出生順（1942年5月8日・14日）と思われる。「六超」は中国人の偶数好みと6の「吉祥数」ラッキー・ナンバーの性質とも符合する人数であるが、首・尾の林・趙が1/3を占める日・中・韓混成の陣容の重層性が興味を引く。瀬越憲作は1920・28年に橋本・呉を門下に収めてから余り弟子を取らなかつたが、63年には韓国棋院二段の曹薫鉉チョフンヒョン（1953～、82年九段〔韓国初〕）の入門を許し、囲碁伝来の元の中国と経由地の朝鮮半島に対する恩返しは「碁神」と世界王者を育てた。中山が讃えた昭和の代表格の内の呉・林・趙は日本・世界の囲碁国際化を動かしたが、3強国で受けて来た格別の尊敬は自国強盛と国際競争への期待が根底に有ろう。

### 日本的「美形・重厚・穩健・淡泊」と中国的「型破り・豪快・過激・貪欲」

聶衛平は『我が囲碁の道』第16章「若手棋士への希望」の中で後輩の新鋭群に対して、日本の超一流高手を打ち敗るやぶ為には先ず中国王者の自分を超えねばならぬと檄を飛ばし、大きな目標や碁芸の高峰への到達に有益な助言として大竹英雄の次の論評を援引している。「中国の棋士の長所は、読みが大変深く、“接触戦”（中国語の原文“肉搏戦”の直訳＝“格闘”）の実力が相当有り、勝負欲も強烈なことである。短所となれば、私の言葉で言うと、盤面を見る眼、

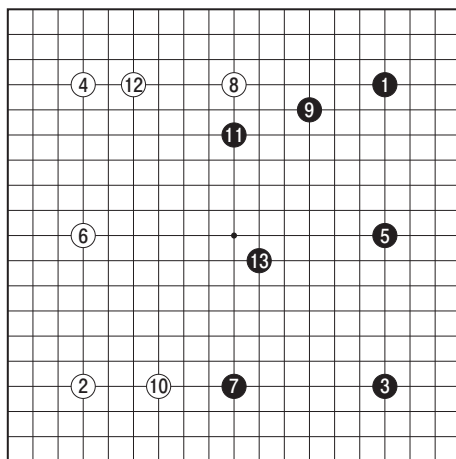
盤面全体を使う際の明快さが不十分な処が有る。これは将来の問題であり、日本の超一流棋士との差でもある。盤面を見渡した時の瞬間的な靈感を如何に備え、且つ保って行くか、これぞ中国の棋士にとっての難題の1つのはずである。日本の超一流棋士は各々1時代を劃した独自の碁風を持っている。例えば、藤沢秀行の盤面に対する明快な掌握、坂田の快刀乱麻を断つ切れ味、高川の流水先を争わぬ自然流、呉清源の碁盤を小さくし思考を広げる発想、石田の“電子計算機”と称される精確さ、武宮の誰にも真似できない伸びらかな心、等等である。中国の選手には未だこの様な輝かしい芸風は見られない。中国にも此等の優れた特長を有し、且つ複数の碁風を結合させた棋士、例えば坂田+武宮、高川+藤沢の様な棋士が一定数誕生する事を、我々は期待している。21世紀の一流の專業棋士は恐らくそういう類型に為るかも知れない。」聶はこの見解に賛意を表し優れた棋士が努力を積み重ねれば到達できる境地だとしたが、直感的な大局観と重層的な碁風の兼備は21世紀に人工智能に由って実現に至ったものの、至芸を目指す高次元の理想は30年経った今も中国の一流棋士には至難の課題である。大竹は富士通杯世界戦初期の日本勢5連覇の4人の功労者の中で最も日本的な色彩が濃く、中国で日本の碁の特徴とされる「美形・重厚・穩健・淡泊」の手本の様にも見えるが、「坂田+武宮」「高川+藤沢」の様に互いに異質と為る超一流棋士の碁風を複合させるとは、中国の碁に多い「型破り・豪快・過激・貪欲」を感じさせる大胆不敵の提言である。

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第26章第3節「宇宙流、武宮正樹」の中で、有名棋士に対して非專業諸兄への上達の為の助言を募る日本棋院の意見調査に、中国の江铸久九段が「武宮先生の碁を並べること」と回答した事を取り上げている。昭和碁界の一特産品であるその芸風は筋も恰好も良く專業にとっても物凄く勉強に為るとした上で、若し第28期十段戦第2局(対趙治勲, 1990.3.28)の武宮先番の布石(図1)の様な手が打てたら、間違い無く選手権に手が届くだろうが、それが身に付くまでには百年ほど掛るかも知れないと述べている。武宮は件の5番勝負(3.8~4.26)を3-2で制し初の十段位を奪取したが、世界戦2連覇の直後とテレビ亜細亞選手権戦4連覇の最中の戴冠を導いたこの1局(3.28, 147手完, 黒中押し勝ち)で、天馬空を行く奔放さと関連の石が等距離に在る均整さを持つ宇宙流は爛熟の様相を呈した。『現代囲碁大系』第23巻『坂田栄男 下』(諸井憲二執筆, 1982)の第24局(第4期名人戦挑戦者決定リーグ戦, 79.7.19, 対[先番]武宮正樹, 222手完, 白中押し勝ち)の解説「未完の大器」では、四・五段時代(68~70)に「武宮の碁は石が盤上を斜めに走る」と言われたのが「宇宙流」命名の起源とされ、規模が大きいと共に未だ粗削りで斑が有り無限の可能性を秘めているが、本因坊は連覇するという因縁の経験則を2回(76・80年1期止り)破った事と関連して、逆境や窮乏生活を知らぬ「坊ちゃん育ち」の所為で勝負に対する執念が薄いと断じられた。生い立ちや環境の影響が大らかな人柄や碁風と為る盤上に現出されるのだという推論は、幼い時から苦境に慣れ受難体験が多い坂田の冷厳な性格と峻烈な碁風の相関にも適用する。地を目

一杯稼いで置いて凌ぎ勝負に賭ける坂田流には少年時代の賭け碁の投影も感じられ、入段試験で同期院生が画策した体力戦で落ちた事に由る人間不信も自己中心の傾向の根底に有る。第22巻『坂田栄男 上』（執筆者は下巻に同じ〔以下2巻同一の場合は略す〕、1980）の巻頭の入段記念手合（34.11.25～26、『棋道』主催・翌年新年号掲載、230手完、黒2目勝ち）の解説「巢立ちの譜」で、初段格として花形棋士の呉清源五段に指導碁（2子局）を打ってもらった事の感激を表す前に、<sup>プロ</sup>専業候補生から入段者を決める同年の予選手合での不当な体力負けへの積怨を吐露している。30歳も隔たった両者は人・碁が其其陰と陽の2極に属し氷炭相容れない印象さえ持たれ、起手で星を連打し中原へ躍り出る武宮と三々を愛用し地取りに走る坂田は正反対なので、対蹠的な両者の一見有り得ない統合を求める大竹英雄の出題は碁の進化にとって刺激的である。

「高川+藤沢」の組み合わせは同じ大正世代で年齢差が10歳と余り大きくないが、両者の常識人対変人、<sup>バランス</sup>均衡感覚対異常感覚、地味対華麗の相違は水と油の様である。2人の対蹠的な性質は第15期本因坊戦七番勝負第4局（1960.5.30～31）に現れ、その「無コウの一局」（高川秀格著『秀格烏鷺うろばなし』〔日本棋院、1982〕第6章「不滅の九連覇」第8節の題）は、秀行の代名詞とも為る「不注意に由る意外な失敗」と乱心が自滅を招く教訓として棋史に刻まれている。高川は1勝2敗で迎えた本局で形勢不利を挽回すべく白108の勝負手で劫を仕掛け、劫争いの2巡目にヒョイと打った白122の覗きに対して秀行は反射的に粘りだが、劫材に為っていない手だったと直後に気付いて「高川さん！無劫じゃないか！」と叫んだ。『昭和囲碁風雲録』第19章「呉清源、天下無敵」第2節「高川、本因坊九連覇」では、本因坊愈々土俵に足が掛るかと思えた局面で挑戦者が黒123と応じた瞬間に、目の前に見えて来た栄冠は秀行の手元からツルリと高川の手に移ったと表現されている。黒123で124の処に粘れば白123切りでも黒a、白b、黒c、白d、黒e、白f、黒g、白h、黒j、白k、黒1まで、白は駄目詰りの為に押す手無し（図2参照）だから、勝勢を保って来た秀行は劫の解消で一巻の終りと為る決定的な勝機を見逃したわけである。棋士は只でさえ不用意な1手通過（不要の1手）を大変

図1 第28期十段戦挑戦試合五番勝負第2局、趙治勲十段 vs. 武宮正樹九段（先番5目半込出し）、第1～13手、147手完、黒中押し勝ち



出処 = 中山典之『昭和囲碁風雲録』岩波文庫版（2014年）下巻307頁の参考図1。全譜は『1991年度版・囲碁年鑑』（『棋道』5月号臨時増刊号、日本棋院）所収（117頁）。

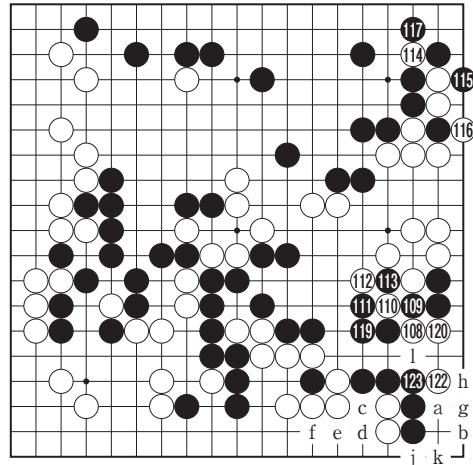
な損失や罪過と見做すから、異例の慎重さで運んで来た末の手拍子に悔恨を禁じ得ない胸中は痛いほど分る。囲碁用語としての「視く・覗き」は「国語+百科」辞典の最高峰と自賛して憚らぬ『広辞苑』では、第7版(新村出[1876~1967, 言語学者・国語学者・辞書編纂家]編, 岩波書店, 2018)にも入っていないが、『日本国語大辞典』第2版(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編, 全13巻+別巻1冊, 小学館, 2000~02)の「のぞき【視・覗】(名)(動詞“のぞく[視]”の連用形の名詞化)」の⑤として、「囲碁で、相手の断点の隣接点に打ち、次に切るぞと示威する手。ツギを強要しキカシの手段として用いる」と説明されている(以下、辞書の引用は特に断りが無い限り、初出に基本情報を記載した現行版に拠る)。勝負師は示威・強要・利かしに反撥し勝ちで圧力に屈

し欺瞞に騙される事に耐え難いので、秀行は自分に腹を立てる余り「頭に来た」「何て碁だ、みっともない」等と烈しく零した。まだ優勢なのに自爆で崩れた精神状態は最後の最後の逆転(255手完、白2目半勝ち)を許し、橋本宇太郎が言う「憤兵は勝たず」を証明する様に負の感情が尾を引いて後2連敗した。藤沢は『勝負と芸——わが囲碁の道』(秋山賢司記述・編集, 岩波書店, 1990)第3章「名人から棋聖へ」第2節「名人戦創設に奔走」の中で、59年暮れ~60年正月の第5期最高位決定戦で当代一の坂田栄男から3-1で奪冠した後、自信満々で臨んだ本因坊位挑戦で鼻を見事押し折られた敗退(2-4)を振り返って、流れを変えた軽率は観戦の地元愛好者の不意な閃光撮影に応えた事も一因だとした上で、神経が張り詰めている中の影響が有るにせよ勝負を争う上で自分は未熟だったと反省する。無劫と指摘された高川が平然と「ああ、そうか」と応じた事も秀行の癢に障ったが、冷静水の如き高川と激越火の如き秀行の人柄らしい碁風の融合はやはり奇想天外の様に思える。

### 異質類型の碁風の相互内包・融和合成の可能性

貴方は本狸だからあの無劫は承知の上で打ったのではと高川格はある非專業から訊かれ、

図2 第15期本因坊戦七番勝負第4局, 本因坊秀格八段 vs. 藤沢秀行八段(先番4目半込出し), 第108~124手, 255手完, 白2目半勝ち

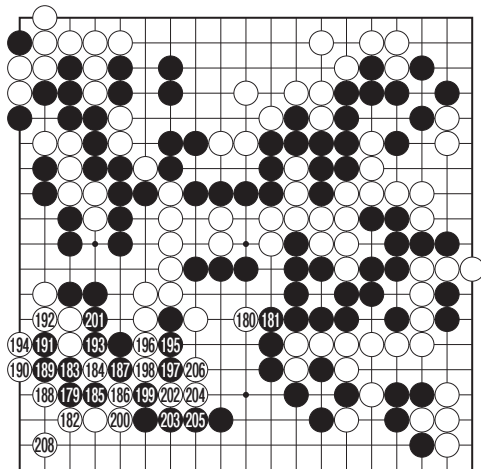


⑪劫取る(110), ⑫同(113), ⑬同(110)

中山典之『昭和囲碁風雲録』文庫版下巻103頁の参考図, 高川秀格『秀格烏鷲うろばなし』145頁の1図, 『現代囲碁大系』第19巻『高川格 下』(村上明執筆, 1983)117頁の第6譜に拠り作成。

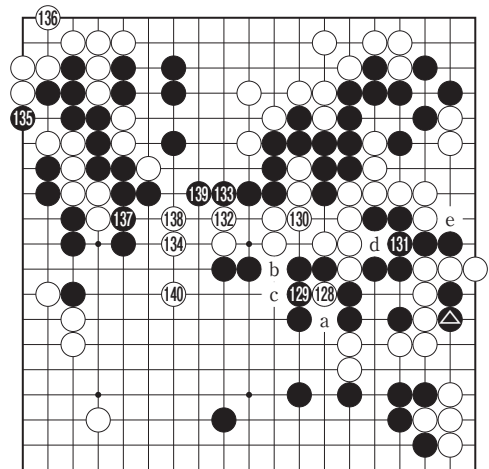
意図的に相手を乱すのなら達人だが自分にはそんな余裕は無く単純に誤っただけだと答えた。彼は第7期本因坊戦挑戦者決定戦（1952.4.23～24）で前期挑戦の坂田栄男（同七段）を破り、初の大舞台で一躍に2連覇中の本因坊昭宇を4-1（6.25～8.21）で引き摺り下ろした。第1局に臨む36歳の彼は生娘の様に緊張・興奮し前夜も打ち掛けの夜も一睡できず、白の大石を仕留めたと思ひ込み種石が抜けているのを知らずに不面目の敗北を喫した。『現代囲碁大系』第18巻『高川格 上』（1981）第20局の最終譜（179～208）解説「13尻抜けの見損じ」に曰く、「黒87以下が敗着である。（中略）/白102と切られた。それまでは黒103で中の三子を助け、辺の二子は捨てても白の大石に関係ないと思っていた。この錯覚は“高川の尻抜け”で有名になってしまった。」（87・102・103は通算187・202・203、図3参照）「本因坊の白128は歴史に残る妙手だが、僕の終局寸前の見損じも歴史に残る大見損じですね」と彼は他人事の様に「高川尻抜けの一局」を評し秀行の様な過度の自責をしなかった。早見え早打ちの「天才宇太郎」の面目躍如たる白128の妙は中山典之の詳説の通り、これに対して黒がaの方から抱えると、白b、黒cの交換だけで先手で断点を粘がれてしまうから、黒129は已むを得ないが、今度は白から131に抛り込み、黒d、白eと渡る手段が生じたので、再び已むを得ずに粘いで防いだものの、此処で1手の道草を食っている間に橋本は白140までと黒の勢力圏に進出し、漸く勝負の圏内に漕ぎ着けたのである。（図4参照）高川は8歳年上の本因坊の英名に背かぬ妙手を見

図3 第7期本因坊戦七番勝負第1局、本因坊昭宇八段 vs. 高川格七段(先番4目半込出し)、第179～208手、208手完、白中押し勝ち



207 5子粘 (184)  
『現代囲碁大系』第18巻『高川格 上』193頁の第13譜に抛り作成。

図4 図3と同局、第128～140手



中山典之『昭和囲碁風雲録』文庫版下巻30頁の参考図、『現代囲碁大系』『高川格 上』巻190～191頁の第10～11譜に抛り作成。



て顔が見る見る真っ赤に染まったが、激闘の洗礼を受けた後は盤上で能面の様な表情しか見せず「狸」と諱名された。この一戦は14年前の同じ日に始まった秀哉名人引退碁と通じる歴史的な意義があり、次に「火の玉」の橋本が「微温湯」の高川に4連敗した展開は現代囲碁の変容を意味する。

「高川、本因坊九連覇」の評に有る「現代碁の草分けとも言うべき、スマートな碁」から、最新鋭文明利器の smartphone (パーソナル・コンピュータ 個人用電脳) の機能を取り込んだ携帯電話端末が連想されるが、中国語訳の「智能手机 ([手に持つ] 携帯電話機)」と「人工知能」に因んだ「智能碁」の造語も似合う。高川格は橋本宇太郎や藤沢秀行・坂田栄男等と違って目の覚める様な妙手を放つ事が無く、呉清源や梶原武雄 (1923~2009, 65年九段) の様に定石を創出した事も無い。秀行・梶原と並んで「戦後/戦後派三羽鳥」と称された山部俊郎 (1926~2000, 63年九段) は、本因坊秀格の打撃は蠅も殺せないと皆が言っているが彼は決して非力ではないと語った。「一間跳びの高川」「帽子の高川」と揶揄された本因坊の前人未到の9連覇は、局地戦の得失に拘らず形勢判断にものを言わせ大局を制す戦法の成功と言える。彼は林海峰・石田芳夫に先んじて碁の要諦を伝統的な力戦から現代的な計算に変え、生誕100周年 (2015.9.21) の2週間後に初めて互先でプロ棋士に勝った人工知能にも、高川流と通底する「不戦而屈人之兵」(戦わずして人の兵を屈する) の地味な凄さが有る。春秋時代 (紀元前770~前476) の兵法家孫武 (生歿年不詳) に仮託した戦国時代 (前475~前221) の兵法書『孫子』では、この逆説的な境地は「百戦百勝」よりも「善之善者」(善之善なる者) とされるが、流血無き勝利を導く高川の避戦は戦闘力を担保とし決闘を辞さない一面も有る。9連覇の中で相手を3-2の角番に追い詰めた7回は例外無く次の1局で止めを刺し、特に第13期の第6局 (1958.9.1~2) で4期ぶり・2度目挑戦の杉内雅男の肉薄に対して、紳士の体面を忘れ能面をかなぐり捨て半狂乱状態で逆転の半目勝ちを挽ぎ取った。「弱ったな!」「負けた!」と絞り出す様な呻き声を発しながら石を盤上に敲き付ける姿 (小説家尾崎一雄 [1899~1983] の観戦記の引用を交えた「高川、本因坊九連覇」の描写) は、選手権戦は2匹の闘犬が2日間に亘って対局場という檻に入れられているみたいな物だ、という『秀格烏鷲うろばなし』第7章「最後の花」第5節「力の限界」の冒頭の感慨を体現した。第4節「ねばりにねばる」で第7期 (旧) 名人戦挑戦 (1968.8.21~10.4) の成功を振り返って、二枚腰の林海峰に勝ったのだから三枚腰だという呉清源の褒め言葉を引いている。本因坊初奪冠の恰度16年後に始まった決勝を同じ4-1で制した53歳の健闘は、自ら唱えた「棋士50歳限界」説を打ち破り後の秀行の67歳時の選手権防衛と重なる。秀行は異常感覚に見えるが全体の均衡を考えた工夫も有ると「天才」山部は言ったが、高川が秀行並みの不死身の闘魂を秘め秀行が高川と同じ均衡感覚を持つという相互内包は、「高川+藤沢」「坂田+武宮」構想や他の色々な異質類型の芸風の融合の可能性を示唆する。

藤沢秀行が高川格の軽率な手に付き合ったのは性急な性質の他に、まさか本因坊が無劫を打

つ事は無いと安易に信用してしまった心理が大きい。岩本薫も呉清源ほどの高手は見損じが有り得ないという気迷いで負けた事が多いから、秀格が一段低い藤沢八段に対して本局及び七番勝負を制したのは貫禄勝ちとも言える。20世紀最強の将棋棋士大山康晴（1923～92、54年時点での名人3期達成に由り58年九段）も、相手に信用させる力を持つ事の重要性を説き自らその心理面の武器を備えていた。「勝負は周囲を信用させることが第一だ。信用されなくなったら勝てない。あの人は強い、とか、指し手の中に間違いがない、あるいは、あの人が優勢になったら頑張っても、もう勝てない、と思われるのが信用で、いろんな信用をつくると、相手の戦う意欲が半減し、こちらの勝ちにつながる。」棋士出身の将棋著述家河口俊彦（1936～2015、00年七段、02年引退、追贈八段）は、『大山康晴の晩節』（飛鳥新社、2003）の「一章 ガンとの闘い」第1節「六十三歳の名人挑戦者」の中で、遂に信用を得られなかった自分の様な者から見ても彼の名言はその通りだと敬服している。北宋（960～1126）の政治家・学者欧陽脩（1007～72）等撰『新唐書』（唐代の正史、1060年成立）「列伝第三十・褚遂良」に「信為万事本」（信は万事の本を為す）と有るが、日本で社訓等に使われるこの命題は大山の真骨頂を表す要訣に別の意味と説得力を持たせる。実力の評価に基づく高手への信用は中国の碁界でも思考停止の付き合いの形で間々有るが、秀行の信用を得た高川は中国では他の超一流棋士と比べて評価・信用度が相対的に低い。

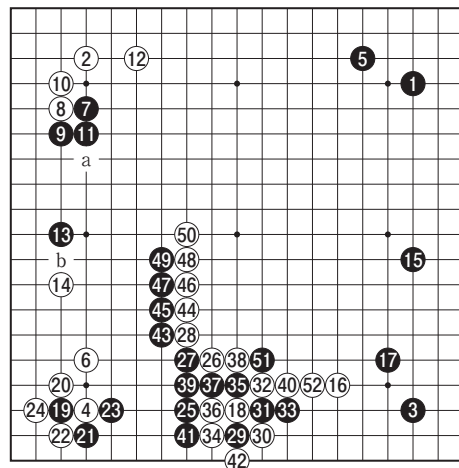
世界覇者と成る前の柯潔は高川格の「流水不争先」も鳥村俊廣（本名利博、俊宏・俊広を経て改名、1912～91、60年九段）の「忍の棋道」も緩着を容認する保守的な傾向だと斬り、呉清源を除く日本の名棋士の中で坂田栄男が唯一の現代的な意識と実力の持主だと断じた。<sup>5)</sup> 彼は世界戦2冠目獲得（第21回三星火災杯世界囲碁マスターズ、2016.12.8）の3日後、第18期阿含・桐山杯日中決戦で河野臨（1981～、06年九段）を下したが、対局地の京都で述懐する際「礼義之邦」出身の王者らしい謙虚さを以て、日本の碁界に対する表敬と日本の囲碁文化に対する礼賛をし、坂田に秀行の名を添えて子供の頃から両先生の棋譜を並べて勉強して来たと言っている。<sup>6)</sup> 『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 上』（志智嘉九郎執筆、1980）の第9局（日本選手権手合決勝、33.8.30、橋本五段〔先番〕対呉五段、245手完、白2目勝ち）の「痛恨の譜」（解説の総題）で、高度な緊張を強いた大寄せが続く第5譜（80～102）の解説「絢爛と平淡と」に、華やかで変化の多きこと電雷の如き碁が得意な2人の本局で見せた渋さの正体の形容として、「絢爛の極平淡に至る」という北宋の文学者蘇軾（号は東坡、1036～1101）の言葉が借用された。絢爛たる表現を追求して究極が平淡な表現に落ち着くという逆説は囲碁にも当て嵌まり、昭和の黄金期の碁・棋士の絢爛・豪華も平成の「白銀期」（造語）に平穩・恬淡な感じが増したが、中国では新興王国の旺盛な上昇志向を反映して坂田・秀行の「懸命流」への憧れが根強い。

### 囲碁観・人生観に関する大棋士の信念・気合

『現代囲碁大系・坂田栄男 上』の巻末を飾る第25局(第2期[旧]名人決定挑戦手合七番勝負第7局, 1963.9.29~30, 藤沢秀行名人・八段[先番]対坂田九段, 178手完, 白中押し勝ち)は、「本因坊・名人の栄冠」(解説の総題)を獲得した「終生思い出の局」(「序」の言)である。前年ぎりぎりの土壇場で呉清源に手痛い持碁負けを喫し十中八九手中にしていた名人を秀行に持って行かれた無念さを以て、今期総当り戦の7勝1敗で挑戦権を取り8月4日に始まる七番勝負で全力投球した。「夏は名人戦」と題する第1譜(1~18, 図5参照)の見処として、「握って私の白番となったが、ここまできては、白も黒もない。精神力の戦いである。/黒3と名人は、私の得意とする三々を打ってきた。序盤の駆け引きである」と有る。『囲碁百科辞典[改訂増補]』(1983)の「1. 囲碁用語・術語辞典」の中の「気合い」の項に曰く、「気合いで打ってしまった」とは坂田栄男(名人本因坊)の口グセであるが、勝負の世界で生きている棋士は気合いで碁を打っているといっても過言ではない。」和語の「気合」は中国の碁界で「氣勢」に取って代った外来の術語として定着しているが、**気合の塊の様な坂田に対して秀行が敵のお株を奪うのは可く有る先制抗撃(造語)**である。『現代囲碁大系』第38巻『石田芳夫 下』(1983)の25局中、石田が白2・4で両三々を占めた

碁は2局有る(第3局[第12期[旧]名人戦挑戦手合七番勝負第3局, 73.9.13~14, 対[先番]林海峰名人, 261手完, 白2目勝ち), 第9局[第30期本因坊戦挑戦手合七番勝負第4局, 75.6.16~17, 対[先番]坂田栄男九段, 167手完, 黒中押し勝ち)。この時代には能く用いている両三々は特に相手が地に辛い林の時なおさらは尚更多用する傾向が強く、坂田・(藤沢)朋斎に多い黒番での両三々は打った事が無いと第3局の解説で述べているが、林と同じ実利重視の坂田を相手に互いに得意な布陣を使うのは気合の現れとも言える。第15局(第33期本因坊戦挑戦手合七番勝負第3局, 1978.5.31~6.1, [先番]对本因坊劔正, 257手完, 黒半目勝ち)の解説「棋風の転換」でも、「このシリーズはお互いに棋風が逆転したかの如き趣があった。つまり

図5 第2期(旧)名人決定挑戦手合七番勝負第7局, 藤沢秀行名人・八段(先番5目込出し)vs. 坂田栄男九段, 第1~52手, 178手完, 白中押し勝ち



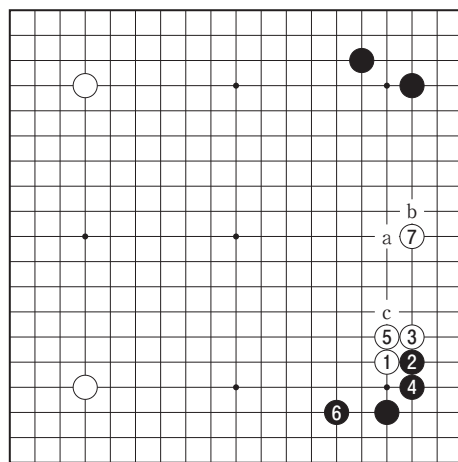
『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』265~267頁の第1~3譜, 坂田栄男『炎の勝負師 坂田栄男② 碁界を制覇』124~125頁の第1~2譜に拠り作成。

白番における同九段は、布石で両三々を占めることが多く、まるでお株を奪われた感があった。/ “殺し屋”の風貌は影をひそめていた」と語り、両者間の初の七番勝負で「相手のお株を奪う」（第1譜 [1~16] 解説の題）本因坊の尋常ならぬ闘魂を思わせる。

武宮正樹は『盤上に元気と夢を——宇宙流が到達した囲碁観』第1章「なぜ石が上に行くのか」第3節「地が多いと不安」の冒頭で、碁は最終的に地が多い方が勝つ<sup>ゲーム</sup>遊戯だから地が嫌いな人は居ないが、地が多い状態は<sup>どこ</sup>何処か「不健康な」薄い個所が有る事を意味していると指摘する。薄い状況を好み弱い石を凌ぐ展開が好きな棋士も多く、普通の人は多少薄くても地を多く持っていた方が安心するのだろうが、自分は「現金」(地)より「健康」(可能性)を取ると説く。健康であれば人間は何でも出来るわけで、目先の現金を遥かに上回る利益をもたらしてくれるかも知れない、という論理の講釈の実例として誰もが知っている基本定石(図6)を挙げている。曰く、白1の高掛りに黒2・4と付け引き、白5・黒6・白7まで(白7はaやbと開く手も有り、白5でcと掛け粘いで黒6に白bとする型も有る)という20~30年ほど前に大流行した布石で、この分れに対する判断や好みを訊くと、右下隅に確定地(約15目)が出来たから黒を持ちたい人が多い様だが、自分は「黒には発展性がまったくないのに対し、白には無限の可能性がある」と考える。彼は自らの碁碁観・人生観の中でこの発展性・可能性が**実に重要な位置を占めており**、可能性の有る碁(この定石の場合は白の方)が好きだと言いつける。実利偏重を批判し勢力構築を推奨する例示の定石は黒・白や他の隅の配置の違いこそあれ、正に50年前の名人戦最終局で「凌ぎの坂田」と「厚みの秀行」が手本を見せたものである。坂田著『炎の勝負師 坂田栄男② 碁界を制覇』(日本棋院, 1991)の第15局「頂点に立つ」の第1譜(1~25)解説「黒右辺へ先行」にも有る様に、黒11と堅く粘いだのは白14までを絶対とし黒15と右辺に開く作戦で、aと掛け粘ぎ黒bと開く定石は白手抜きで右の割り打ちと為るので藤沢名人に嫌われた。武宮が槍玉に上げた「現金」優先の白8・10・12は他ならぬ地に辛い坂田の選好なので、大竹英雄の「坂田+武宮」の青写真は益々<sup>ますます</sup>無理難題とも創意妙想(造語)とも思われて来る。

藤沢秀行は『勝負と芸——わが囲碁の道』第6章「勝負か芸か」第6節「厚みと実利」で、<sup>せいぜい</sup>精精利子が付く現金の様な実利や地に対して厚みは信用に譬えられ、一文にも為らな

図6 武宮正樹が善悪を論じた基本定石



出処 = 武宮正樹『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』15頁の1図。

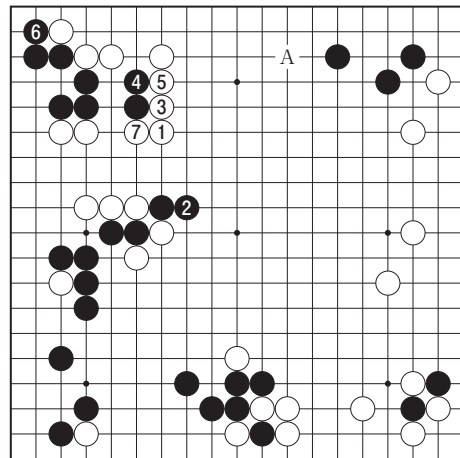
い恐れが有る代りに将来2倍3倍に為って返って来ると言う。一般的には片方を重んずればもう片方を失うが、両者は全く相反するものではないとも力説している。「例えば木谷先生は実利を重視した打ち方をされたが、同時に厚いといわれた。あとくされのない実利を確保し、そこから力強く一步一步前進する。スピード感に欠けるものの、重戦車で各個撃破するような迫力があつた。対照的なのが呉清源先生。超スピードで大場に先行し、部分の戦いにはこだわらない。木谷-呉戦が人気を集めたのは棋風が相反していたからだろう。私と坂田さんも対照的といってい。私が手厚く構えるのに、坂田さんは足早に地を稼ぐ。だから中盤戦は私の攻め、坂田さんのしのぎになることが多かった。」「背中が厚い」と評される彼は実利も好きだが棋風から地の手より厚みの手に行つてしまふ、対石田芳夫挑戦者の第3期棋聖戦七番勝負第1局(1979.1.12~13)の1手が好例に為る。同書

の譜13(図7)中の白7(通算白60)は賛成する棋士は1人も居らず、幾ら秀行さんでも厚がり過ぎたよと言われ評判は散散であつた。「なるほど、白7ではAとでも地につけば普通か。しかし私には白7と厚く備えて打てるという信念のようなものがあつた。」厚みか地かと考えるよりも最善手を追求するのが正しい姿勢と棋士の務めであり、良い手には厚みも実利も無いとした上で、「現代碁はいささか実利に偏している(中略)。布石の段階から地の計算ばかりするようなことになる。(中略)戦い抜く碁、厚みで寄り切る碁など、いろいろな個性がもっと出てきてほしい」と地を第一とし必要以上に重視する時代の風潮に一石を投じている。全13譜の中で例外的に2回も取り上げた同じ対戦相手

が「コンピュータ電脳」石田なので、碁風が正反對の坂田栄男に抱く敵愾心や価値観が似た武宮正樹に対する激賞と合せ考えれば、「がい智能碁」を創つた現実主義者と争碁の伝統を継いだロマン浪漫主義者の「高川+藤沢」の合体はやはり難しい。

第3章第7節「怪物にされる」の中の第3期棋聖戦防衛の回想には、2ヵ月近く前から酒を断つた為か体調は上上だったが、珍しく碁に迷いを感じており何処と無く自分でじっくり来なかつたと有る。迷いを解決するには勉強するより無いから過去数年の石田芳夫の打碁約200局を取り寄せて全て並べた。相手の碁風を掴み対策を練るのではなく迷いを断ち切り自分の碁を取り

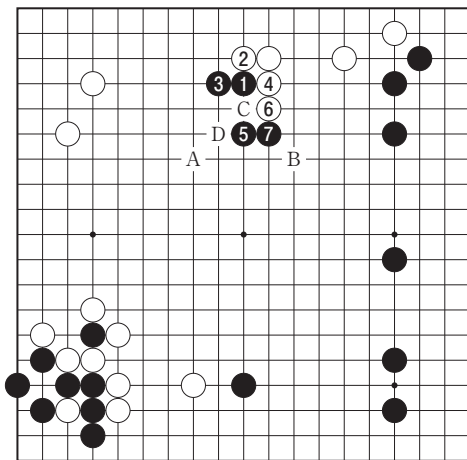
図7 第3期棋聖戦挑戦手合七番勝負第1局、藤沢秀行棋聖 vs. 石田芳夫九段(先番5日半込出し)、第54~60手(図中1~7)、267手完、白3日半勝ち



出处 = 藤沢秀行『勝負と芸——わが碁道の道』176頁の譜13。

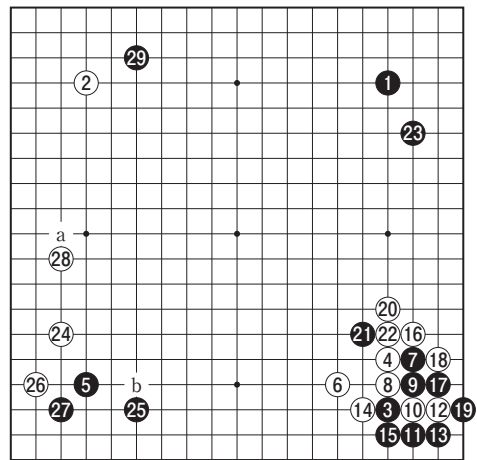
戻そうとしたと言うが、第9～11期(旧)名人戦(1970～72)の対林海峰(4-2で防衛後2-4で挑戦敗退2回)以来の**新型敵手の出現**も一因であったなら、初めて(以後慣習化)の**本格的な戦備**で対処した迷いの中身は極めて興味を引き、後の**本物のコンピュータ(人工知能)高手**に対する棋士の**困惑・緊張と結び付けても示唆に富む**。碁は計算できる物ではないという信念から彼はそれまで石田を余り評価していなかったが、調べてみると思っていた以上に強く特に小手を取る技は超絶的と言えるという結論に至った。自分自身を引き締める意味で役立ったこの勉強は従来に増した気合の入れ方と為り、**新天地への到達の証**が今期の5局(～1979.3.2)中2つの自慢の手を披露している。「秀行の盤上談義」第1節「定石について」の中の譜9(図8)が第4局(2.21～22)の見所で、黒7(通算黒37)が大変な定石外れだが**想到者皆無の秀行流**の妙手として大評判に為った。「定石では黒7でAと断点を防ぐことになっているが、白Bと進出されて右辺のスペースがぐんと小さくなり、恐らく負けだろう。そこで黒7がこの一手になってくる。中央への進出を止めると、右辺の様様がいっぺんにいきいきとしてくるのではないか。常識的には白Cと出られるのがこわく、なかなか打てない手らしいが、それは黒Dとゆるめていい。まあ、理屈はあとからどうにでもつけられる。黒7と打ちたいから打った、ただそれだけである。」『現代囲碁大系』第27巻『藤沢秀行 下』(京野秀夫執筆, 1982)では第1・4局とも入らず、石田が84手目の見落しで157手投了に終わった第2局(1.24～25)が採録され

図8 第3期棋聖戦挑戦手合七番勝負第4局, 藤沢秀行棋聖(先番5目半<sup>ゴキ</sup>出し)vs. 石田芳夫九段, 第31～37手(図中1～7), 177手完, 黒中押し勝ち



出処 = 藤沢秀行『勝負と芸——わが囲碁の道』138頁の譜9。

図9 第3期棋聖戦挑戦手合七番勝負第2局, 藤沢秀行棋聖(先番5目半<sup>ゴキ</sup>出し)vs. 石田芳夫九段, 第1～29手, 157手完, 黒中押し勝ち



『現代囲碁大系』第27巻『藤沢秀行 下』237～238頁の第1～2譜に拠り作成。

ている。解説「盤石の寄切り」の第1譜(1~23)「古風な定石」に曰く、「白4は藤沢得意の中国流を封じた意味。/白6から昔なつかしい大型定石ができた。/22まで厚味対実利の判断とした分かれ。最近めったにお目にかからないのは、小十目の黒地が何とも好ましいのと、白が後手を引くためである。/元来実利が好きな石田だが、このところ意識して背中厚味で打とうとしている。先の名人戦で“大竹さんから厚味の感覚で学ぶところあった”の弁を実証。」(図9参照)敢えて不得手な戦法で相手の得意な流儀を阻む序盤の先制抗撃は転向の様に見えるながらも、敵に楽をさせない意地やお株を奪おうとする魂胆は不動の信念と必勝の気合を貫いている。

### 念力の魔法・不覚の<sup>おとしあな</sup>陥穽と「神算」の<sup>みおとし</sup>「漏算」

「地味な立ち上がり」も石田芳夫が華麗な「秀行流」を妨害した結果と見受けられるが、「黒25は手堅い。本局実利で戦いましょう、の宣言である。そういえばこのシリーズ、藤沢の厚味、石田の実利、藤沢の攻め対石田のしのぎ、という両者本来の持ち味は完全に逆転していた。これは石田の意識的な作戦だったと思われるが、結果的には裏目に出た。」秀行は黒25ではaの挟み(以下白25、黒b……)と迷った末に最も常識的な縮りを選び、好みと逆ながら損は無い「堅実にして足早」(第2譜[24~29]解説の題)の展開に為った。4隅の地を取って置き凌ぎで勝利を導く秀行の腕は坂田栄男に勝るとも劣らぬ感が有り、第7~9譜(72~101)の解説「しのぎの具合は」「見落とす」「一步一步の足取り」に曰く、「白80は急所の一撃。ちょっと目には黒いかにも苦しそう。控え室では“午前中で早くもつぶれか”の無責任な声もあった。しかし棋聖防衛に棋士生命を賭している藤沢秀行、そこらに抜かりがあろうはずもなく、黒81と抑え、白82を誘っての83がしのぎの読み筋。」「白84が敗着。黒85の下がりで活きている。」石田は黒85で95に打つものとはばかり思い込んでおり、「これは見損じ、錯覚というより、見落とすと表現するよりあるまい。85で活きられてみると中央の白はろの切りもあって減法薄い。終局後、時間付け用紙を手に石田“わずか十分か(白84)馬鹿だな””(文中のろは図10中のa)「黒91・95・99、正に一步一步、勝利を確信して手堅い限りである。」「95は(中略)諸々の

図10 図9と同局、第72~101手

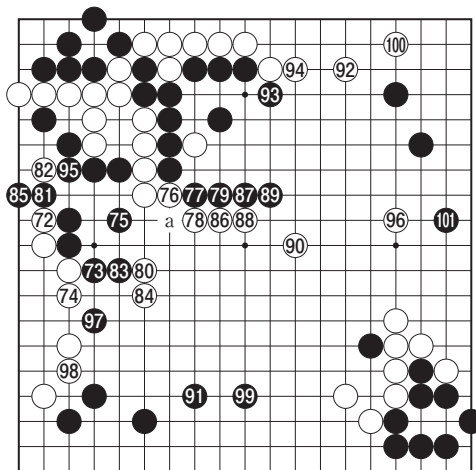


図9文献244~246頁の第7~9譜に拠り作成。

味を封じた。石田“ここで投げたかったのだけれど、早過ぎるし、どうせ写真班は散歩中と思って”と苦しいジョーク。」各9時間の持ち時間を2時間36分（藤沢は2時間54分）残しての幕切れは些か呆気無く、思慮不足に由る見落とし（中国の囲碁用語＝「漏算」〔計算漏れ〕）は「**電腦**」の悲劇と言える。

次の最終譜解説「黒快勝」は「本局立会人を勤めた大平“秀行先生の迫力は怖いほど”」と結んだが、昭和碁界の「力戦の雄」大平修三（1930～98、63年九段）の驚嘆を裏付ける様に、「藤沢棋聖は対局相手に放射能をふりかける”の言も出たほど。棋聖の勝負に対する緊張、高ぶり、着手の冷静さが巧みにマッチしたシリーズであった。」同じ導入部の中の「圧倒的な勝利であった。（中略）全棋界が脱帽、目を剥いた感があった」は、**対局相手に放射能を振り掛ける今日の頂上級囲碁人工知能の猛威**を形容する事も出来よう。「このとき藤沢棋聖は強かった」という特筆と対に為るかの様に、『現代囲碁大系』第26巻『藤沢秀行 上』（小西泰三執筆、1981）の巻末論考「藤沢秀行 人間と碁」第7節「棋聖戦」に、「このシリーズは強かった。全プロ棋士が秀行の強さに眼をむいた。一時期は天下を制した石田芳夫程の打手がまるで問題にならないのである。全身からほとばしりける迫力に圧倒され、石田流の小立刀の冴えも、細碁になればの気持ちもまるで通用しなかった」と有る。『大山康晴の晩節』序章第1節「甦った大山将棋」の冒頭の第50期名人A級順位戦の話では、肝臓癌摘出の手術後に直ぐ復帰した大山は連戦連勝、最後の対谷川浩司（1962～、前年度名人位獲得に由り84年九段）局も勝って5人の同率決戦と為ったが、当時単独首位だった谷川竜王・棋聖・王位・王将（史上4人目の4冠王）は7年後の回顧で、「人生の最後になって、大山先生がやっと本気を出してくれた、と思っています」と語り、更に「本当に強かったですね」と呟いた。河口俊彦は自身も体験したその怪力を表す為「大山名人は催眠術を使って勝っている」説を引き、そう確信した森雞二（1946～、85年九段）は大山との対局で中・終盤の勝負処に差し掛かると、1手指して盤側から離れ控室の傍受テレビを見詰めて大山が指すのを待っていた、と綴っている。大山が遺した将棋選手権挑戦の最高齢記録（66歳、平成元年度棋王戦五番勝負で南芳一〔1963～、選手権3期に由り89年九段〕に0-3で敗退〔90.2.16～3.9〕）は、2歳年下の秀行に由る囲碁選手権防衛の最高齢記録（67歳）と好一对を為すが、69歳の誕生日（92.3.13）の11日前の最終局で39歳年少の「光速流」名手を砕く**渾身の魔力**も、当時の谷川と同じ30歳前後だった「**電腦**」石田を無力化した秀行の**念力**を彷彿とさせる。日本の11年ぶりの世界戦決勝進出と為った第22回LG杯三番勝負第1局（2018.2.5）で、28歳の井山裕太7冠は中国の新鋭謝爾豪（1998～、17年五段）の粘りで逆転負けを喫した。囲碁・将棋チャンネルで解説する張栩は中盤で井山の盤面15目優勢を確認して安心したが、常に最強手を選ぶ習性で相手に反撥した井山が強引な勝負手で嫌味を衝かれる展開を見て、**信じられない様な逆転**を**屢々演じる中国棋士の恐さ**を自らの敗戦体験に基づいて紹介し、特に得意な柯潔は催眠術を使っている様



な感じだという諧謔的な譬えで警鐘を鳴らした。数往復後に彼が「大事件」と称す謝の逆襲が奏功し井山は白 180 手目を見て投了したが、催眠術めく魔法を感じさせる執念の勝ち方は虚を衝かれた敗者の不覚の陥穽を思わせる。

『石田芳夫 下』巻末の「略年譜」の「一九七八年（昭和五三）三月、第三期棋聖戦挑戦手合七番勝負を藤沢秀行棋聖と争うも四対一で敗れる。五月、第三十三期本因坊戦で加藤劔正本因坊に挑戦するも、四対三で敗れる。十二月、第二十六期王座戦挑戦手合で、工藤紀夫王座を二対一で降し、王座戦に返り咲く。三十歳」に、翌年 1 月 12 日～3 月 2 日の棋聖位挑戦を 1 年間違えた誤記が出ている。約 1 万 3 千頁に上る巨編の叢書には正誤表の開示の他にも文字・記号の誤植が目につくが、藤沢の代名詞と為り早期の加藤に多く石田も免れない不注意による意外な失敗と結び付けば、呉清源や李昌鎬の「神算」にも誤算や「漏算」が付き物だという囲碁の宿命と妙に符合する。中山典之は『昭和囲碁風雲録』第 15 章「東西対抗戦と関西棋界の分裂」第 5 節「本因坊位、西へ」で、神戸市立図書館長を務めた文化人の志智嘉九郎（1909～95）の危なっかしさの証拠として、その執筆に由る橋本宇太郎著『囲碁專業五十年』の中に散見された重大な誤りを挙げている。「日本棋院渉外部長で橋本宇太郎師のケンカ相手である奥山伍鹿を伍廉。本因坊戦の対局場を提供した橋元文治を橋本文治。そして川端康成は名作『名人』中で、木谷七段を“大竹七段”と仮名で登場させているが、志智氏は“大谷七段”と誤記している。/およそ、書物の中で人名を誤記するなどは在ってはならぬことで、もし、橋本宇太郎師が一度でも校正していたら、これらの間違いは在り得ぬことだが、これは単なる誤植に非ず、（中略）碁界に対する無智を証明する一端ではないだろうか。』『激闘譜

第一期棋聖決定七番勝負 藤沢秀行 VS 橋本宇太郎』（読売新聞社編・刊、1977）の最高棋士決定戦準決勝（1）の大竹英雄名人対（先番）橋本（221 手完、黒中押し勝ち）の第 2 譜（19～40）解説「布石の決勝点」に、大竹に 8 勝 16 敗に負け越ししている橋本は「此処一番」に強く、大竹が長ける早碁では 1 勝 5 敗と為った半面 70 年の十段戦では 3-2 で下したという戦績の紹介に続いて、「先生は売り出し中の若手によく連敗する癖がある。三、四局負けてから、これはいかんと力を入れ出すんだ」——これは橋本九段のスポークスマンともいべき囲碁評論家・志智嘉九郎さんの勝ってほしい、という願いを秘めた言葉だ」と有る。呉清源は気迫の籠った橋本近年の傑作と讃え「先生は若いねえ」と兄弟子を羨ましがったが、35 歳年少の大竹を破った 69 歳の橋本の破竹の強勢は最晩年の大山康晴と重なって見える。同じ根本的な勝因の「本気」を指摘した志智は中山に「熱烈な橋本ファン」と称されたが、知己だけでなく一心同体の代弁者の立場も千載一遇の大勝負の前の希望的な観測から窺える。無頓着な名家に一任された初老の愛棋識者の粗忽への断罪は理にも適い酷な感じもするが、「校正畏る可し」（「後生畏る可し」を振った日本の業界の警句）の通り誤植の消滅は難しい。

高橋輝次（1946～，編集者・文筆家）編『誤植読本』（東京書籍，2000）の巻頭を飾る外

山滋比古（1923～，英文学者・評論家）の随筆「校正畏るべし」（初出＝毎日新聞社 80 年刊『ことばの四季』）に拠ると、この熟語は明治の文人ジャーナリスト報道人福地桜痴（名は源一郎，幼名八十吉，1841～1906，劇作家・小説家・東京日日新聞社長・衆議院議員）が拵えたのであるが、問題の『名人』の母体と為る秀哉引退碁の観戦記は正に『東京日日新聞』に連載していた。「大竹」と「木谷」の混線に由る「大谷」の誤記は彼の囲碁文学の名作に疎いだけでなく、木谷實がその 13 年後に大竹英雄を内弟子にした奇縁も念頭に無かった様な印象を与える。単なる誤植に非ず碁界に対する無智の証と捉えた断罪は単純な知識不足の「無知」以上に、非難対象の姓に引っ掛けて智能の欠如を蔑む様な含みも読み取れる痛烈な鞭打ちである。ところが『昭和囲碁風雲録』の中の歴史的な大見損じの「高川尻抜けの一局」の参考図にも、著者への竹箴返しのように黒石が白石と表記されるという有ってはならぬ重大な誤りが有る。前掲図 4 中の▲（本稿筆者の訂正表記）は『現代囲碁大系・高川格 上』の譜の通り黒（109 手目）が正しいが、誤って白と為っては確認不十分と共に棋形に対して鈍感だという二重の誹りを受けかねない。大学入試の出題過誤の年年続発と同じく専門家の幾重もの点検も万全とは限らないから、囲碁著述家の記述も棋士の思考と通じて他者の指摘で初めて誤謬に気付かされる事が多い。著者存命中の単行本に続いて逝去の 4 年後の岩波現代文庫版の旧態依然は尚更氣に懸るが、自らの誤りに鈍感に為り勝ちの当事者の限界と共に読者の思考停止や看過も一因であろう。中山は第 7 章「新布石の誕生」第 3 節「ベストセラー」で一般人の棋書購入の基準に就いて、「恐らくは著者その人を信用して買っている方が多いと思う」と推測しているが、文人棋士の名声と共に老舗出版社（1913 年創業）への信頼も本書の人気の深層に有ろう。『現代囲碁大系』刊行の偉業を遂げた講談社（1938 年大日本雄辯会 [09 年創業] より改組・改称）も、同音の「高段者」と通じて業界・社会に於ける信用度が高い大手老舗であるが、第 25 巻『梶原武雄』（1984）第 10 局（第 19 期本因坊戦挑戦者決定リーグ戦，63.11.27～28，梶原八段対 [先番] 木谷實九段，296 手完）の本文・目次中の「黒八目半勝」の誤記も遂に検出できなかった。「梶原も長いこと碁を打ってきたものだが、会心の碁というようなものは、残念ながら一局もない。しかしながら、強敵に対してよく対抗し、自分ながらまずまずのできだったかなという程度の作品なら何局かは算えられる。本局はその中の一局であり、ひと様も梶原の名局などと言ってくれる。もちろん、本局とて非常に問題の手の多い碁であるが……」解説「まずまずの一局」の冒頭部分のこの控え目な自賛を見ても白勝ちも自明であるが、選りに選って最上級の傑作を敗局と間違えたのは名局の瑕疵にも似た問題手と言えよう。双方の勝敗を逆にした執筆者は皮肉にも固有名詞の誤りに容赦せぬ中山だから絶句するが、対局の時に偶に魔が差す運命の悪戯や人智の限界を連想させる点で存在の意義を認めよう。

凡そ書物の中で人名を誤記するなどは在ってはならぬという正論の中の「在」に引っ掛るが、存在自体を否定する「有ってはならぬ」と比べて有るまじき場所での存在を否める意が含まれ、

書物中の誤記は別の処ならともかく最も重要な人名に在ってはならぬという風にも取れる。「人名を誤記するなど」の副助詞は『広辞苑』の「など【等・抔】」の4義の中に、「①ある語に添えて、それに類する物事が他にもあることを示す。…や何か」「②それだけに限定せずやわらげていう」等の他、「④その価値を低めていう。相手の言ったことをしりぞける心持で、特にとりたてて示す。否定的・反語的表現を伴うことが多い。…なんか」も有る。近世の用例に次ぐ「僕一にはできません」「うそ一つかない」「疲れ—していない」は高い使用頻度を示すが、中国人の会話は反語の総出演とも形容できるほど中国語の反語表現は遙かに発達している。断定の屈折した強調や辛辣な反撥・揶揄を含む反語の多用は強い自己主張や意地悪さの現れで、中国で発祥した囲碁も相手の言う事を退ける意地の張り合いが遣り取りの特質である。「無智」の鞭撻とも通じて否定的な心持で価値を低めて言う表現は中国語の方が苛烈で、「低・誤記」の字面に即して日本語の「凡ミス・単純ミス」に当る「低級錯誤」が好例と為り、「単純」や該当する英語のシンプルに対して低次元・下位・劣等の錯誤とするから毒々しい。

### 万能全才・無謬無敗であり得ない人智・人力の限界

1899年5月24日の『読売新聞』社説中の「全能全智と称せられる露国皇帝」とす可き処は、植字工が崩し字を読み間違えた所為で「無能無智」と誤植されて了い、急遽訂正号外「謹んで天下に謝す」の配布と露西亜公使館への釈明を余儀無くされたが、「低級錯誤」は「無能無智」に因んで言えば低能・低「智商」(智能指数を表す中国語)の嫌味も帯びる。90年後の平成元年2月9日号『週刊SPA!』(扶桑社)は「大正洗脳」事件に見舞われ、「天皇」を誤植した不敬の後始末として謝罪・発売中止・既発送分回収の措置が取られたが、「建国の父」毛沢東(1893~1976)に洗脳された『人民日報』でも「文化大革命」(66~76)の初期に、「偉大な領袖」毛主席に捧げる祈願の「万寿無疆」(万寿疆り無し)を「无(“無”の簡体字)寿无疆」と誤植する事件が有った。『青島日報』(中共山東省青島市委員会機関紙)でも1967年1月31日に同じ変事が発生し、同紙は公開の自己批判を強いられ「我們的檢討」(我々の反省)と題する始末書を掲載した。「無/无」は鬼門の如く漢字共有の両国で「字禍」(「舌禍」「筆禍」に擬えた造語)を惹起したが、『読売新聞』の渉外事故が相手国の諒解に由って事無きを得たのと違って、封建時代の「文字の獄」(政治関連の筆禍に対する支配者の弾圧)の伝統が残る中国では、全国民が毛を神・帝並みに崇める狂気の中で植字工が「反革命現行」の罪を問われた。<sup>7)</sup> 2010年12月30日の『人民日報』で温家宝(1942~ , 03~13 総理)を「温家宝」と誤植した事で、関係者・責任者処分の観測が内外に出た中で当人は持前の気配りで追究不要を厳命した<sup>8)</sup>が、知の宝庫の館長経験者に対する中山典之の譴責の様に書物中の人名誤記は紛れも無く拙い。

橋本宇太郎師が1度でも校正していたら此等の間違いは在り得ぬという推断は尤もらしい

が、文筆活動に縁遠い本人どころか専門の著述家・校正者でさえ完全無欠の保証は有るまい。新潮社刊『川端康成全集』（全35巻+補巻2冊、1980～84）の巻末に編者の校訂が付き、大量の誤記訂正が示した疎漏は著者・担当者に付き纏う「職業病」の不可避を物語っている。日本棋院設立の年に生れ宇太郎と同じ大阪出身の小説家の全集から人名誤植の例を拾うと、山崎豊子（1924～2013）の全集（新潮社、第1期全23巻、2003～05）第20巻『大地の子（二）』（05）に出た。当初『文藝春秋』1987年5月号～91年4月号に連載したこの長篇は、91年・94年に文藝春秋社より単行本・文庫版が刊行されたが、全集収録時に発生した当該誤植は「第二章富士山」の中の45頁に在る。党中央総会の改革・開放路線採択の1978年12月に着工した上海宝山鋼鉄廠（製鉄所）の建設の為、全面協力を行う東洋製鉄（原型＝新日本製鐵）の柿田専務が北京事務所を訪れた時、「所長は（中略）/“専務は、碁がお強いから、誰とでもすぐ老朋友になれるので、お羨ましいですよ。重工業部部長（大臣）の黎元さんも、専務との対局の時は、日頃のダンディなたしなみもかなぐり捨て、むきになられますでしょう、われわれはああいう光景を見ていますと、専務にはかなわないと、脱帽してしまいます”/五段の腕前の柿田専務に、真底、羨ましそうに云った。」1956年に撤廃と為った重工業部は宝鋼建設の主管官庁の冶金工業部を表す作中の名称で、黎元は黎明（1927～、82～93 同部副部長 [次官]、82～85 兼宝鋼工程総指揮）から姓を取ったが、時の部長唐克（1918～2013）こそ歴代平閣僚（造語、総理・副総理兼務を除く意）中最大の愛棋家である。彼は**囲碁人長寿**の伝説を証明する様に在任（1977～82）中の国民平均寿命（67歳前後）より遥かに長生きし、石油工業部部長在任（82～85）中の尽力で出来た中日友好囲碁会館の**棋界への貢献も世紀に跨る**。1970年代の売り上げ日本一の製造業者新日鉄の初代社長・会長（1970～73、73～81）稲山嘉寛（1904～87）は、経済団体連合会会長在任（80～86）中に日本棋院第6代総裁（82～87）も務め、文化交流をも願う唐の懇請で2億円の寄付を集め中国碁界の中心施設の落成（86）に寄与した。稲山と共に双方の初代名誉館長を務めた唐は日本棋院から名誉七段を贈与されたが、**両国の経済往来・人的交流に於ける囲碁の「無用の大用」**は上記の会話にも窺われる。扱て置き、碁と関連するかの様に直後に**手拍子や不注意に由る意外な失敗めく誤植**が目飛び付く。駐在員が「重工業部の（中略）趙大烈次官が柿田専務と一対一でお会いしたい」旨を伝えると、所長は「“何でしょう、わざわざ一対一などと——”/訝しがるように云うと、柿田は飄々とした表情で、/“まあ、趙大烈一流の云い方だろう、（下略）”『人民日報』の「室」は「5筆輸入法」（字形5類型選択入力方式）に起因した誤りで、日本語で「趙」と同音・同部首のこの「超」も起り易い間違い・見落しの部類に入るが、正しい表記の5行後に在りながら校閲の目に引っ掛らなかったで**専門の限界を示唆する**。

山崎豊子は目下の新作に全身全霊を傾ける余り過去を振り返らない姿勢が有名であるし、80歳超の高齢で慣れ切った旧作の海から1点の不備を見付ける事は至難の業に違いない。69歳

で白内障の手術を受け体力の衰えて引退した高川格は『現代囲碁大系』打碁集下巻の「序」で、碁は長時間に亘って神経を張り詰めていかなければならないが、心身が衰えて来るとその緊張に耐えられなくなって来、読みを省略したり形勢が悪い時に諦めが早くなったりする、その様な状態になる以前が限界であろうとした上で、自分は1969年の名人防衛戦から緊張を持続できなくなっていたと述べている。彼は本因坊失冠の1961年に唱えた「50歳限界説」を68年(53歳)の名人位奪取で破り、藤沢秀行・坂田栄男の還暦前後の大活躍を挙げて、人間の寿命が延び健康管理を大切にすれば限界も引き延ばされると説くが、87歳の逝去まで現役を続けた橋本宇太郎や89歳時に遺作の長篇『約束の海』を『週刊新潮』に連載中だった山崎は、驚異的な気力を世人に賛嘆させる半面精力・余命を全て現在・未来に注ごうとしたであろう。人に見せられる様な碁は余り無いとする考えと筆不精に由って棋譜を取って置く事は全くせず、先年刊行の全集の棋譜も編集担当の友人志智嘉九郎が10年以上も掛けて収集したものだ、という『橋本宇太郎 上』「序」の開陳からすれば回顧録を校正しなかったのも頷けられる。高次の目標に向って疾走する老将の優先順位に鑑みても個別の誤記は問題に為らないが、「超大烈」の件は寧ろ超大手出版社の制作で多重確認の網を擦り抜けて了った事が訝れる。囲碁の高手が縦令長い時間を掛け最善の努力を尽しても悪手を防ぎ切れない事と同様に、人間の知的な創造活動は所詮万能万全の神の無謬無敗の領域に到達し難く定着し得ない。

『我が囲碁の道』第4章「恩師たち」の中の聶衛平が少年棋士を叱る「臭棋」(「臭」=下手糞)は、日本語版(田畑光永訳『私の囲碁の道』, 岩波書店, 1988)で「ウソ手」と訳されたが、次の段落中の「橋牌」(西洋骨牌の bridge)の「臭牌」の訳語「へま」との整合性を考えても「へぼな手」が良からう。『日本国語大辞典』の「うそ-て【嘘手】」は「(名) 囲碁, 一見よい手にみえるが、相手に正しく応手を打たれると、その欠点をあらわしてしまう手」と定義され、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の語釈は「本手に対することば。一見もうけたようでも、実さいにはもうかかっていない手。相手に正しく応接されるとかえって損する。瀬越憲作(名誉九段)に『本手とウソ手』という著書がある」と為る。『広辞苑』の【へぼ】の「(平凡の略か) ①わざのまずいこと。また、その人。へた。②野菜・果物などのできの悪いもの」に対して、『日本国語大辞典』の項は「(《名》(形動) ①技量のつたないこと。腕前の拙劣なこと。また、その人やそのさま。へた。②すぐれたところのない、平凡なこと。また、その人やそのさま。③野菜・果物の出来の悪いこと。また、そのさまやその不出来の物。うらなり」等の5義である。『広辞苑』の両義には用例の「俚言集覧“下手を一と云、一棋・一象棋など云”。“一な絵”」「“一きゅうり”」が有り、その拙劣・出来損いの意味は囲碁・象棋の下手を表す中国語の「臭」(下手糞)と通じる。AlphaGoに完敗した樊麾の自責の弁にも出たこの形容詞は「臭い」「芳しくない」意で、「醜」「愁」との同音(chou, 其其第4声と第3声・第2声)も負の形象を強めている。「臭い手」(『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の語釈は「ちょっと問題のある手」と異なっ

て、「臭棋」の「臭」は「臭い」の「怪しい」意は無く専ら「厭な匂いがする」「不快」の意である。「臭棋」と同音の「臭気」(chouqi)に因んで言えば臭気が我慢できない事を表す熟語には、「臭不可聞」(臭くて嗅ぐに堪えない。鼻持ちならない。醜悪この上無い)と有る。良さそうに見える「嘘手」に対して「臭棋」は「惨不忍睹」(惨状は見るに堪えない。悲惨目を覆うばかり。見るも無惨)の様も有り、中性的な「正しくない」意の前者が為れぬ罵倒語として若輩に落す覇者の「雷」に相応しい。中国語にも「臭い物に蓋をする」と同義の「捂蓋子」(「捂」=厳重に封じ込める)が有るが、身も蓋も無い「臭」で拙劣・低能を酷評し嫌悪・軽蔑を吐露する痛烈な表現は中国的である。

### 「へぼ」「策」<sup>ざる</sup>「校書掃塵」が示唆する囲碁の至難

『日本国語大辞典』の「へぼ」の用例(4点)の初出は「洒落本・寸南破良意(1775)一座」で、次の「俚言集覧(1797頃)」の文章は上記の前に「へぼ 下濁」も有る。最後の「可能性の文学(1946)〈織田作之助〉“名人がさしてもへぼがさしても、この二手しかない”」は、阪田三吉(1870~1946, 17年八段, 55年贈名人・王将)の死に触発された評論である。文壇の大家や「旧式の定跡」に楯突く彼の将棋好きの「無頼派」小説家(1913~47)は、平手将棋の初手に角道を開けるか飛車の頭の歩を突くかの2手しか無い定跡を顧みぬ阪田の、一生一代の対局に未曾有の端の歩突きを敢行した無謀な野心と純粋な青春を称賛している。毒舌家が雲泥の差の例に用いた「名人」「へぼ」の対極は碁界の「無頼派」藤沢秀行に於いて、初代実力制名人の貫禄を以て後輩の名人経験者や後の名人を「へぼ」と貶す形で現れた。彼は「へぼ」の初出の200年後に発足した棋聖戦の初防衛成功で自負が空前に膨らみ、在日米国人芸能人・随筆家イーデス・ハンソン(1939~ )との対談(掲載誌・号未詳)で、最高位保持者の眼中に人無しの優越感と酒精依存症<sup>アルコール</sup>によって加勢された放言癖を發揮して、林海峰を「ありゃ、へぼだね」、大竹英雄を「ちょっと勝負根性が足らんような気がする」、石田芳夫を「全然へぼ、問題にならない」と両断した。作家沢木耕太郎(本名は非公表, 1947~ )の短篇実録文学「帰郷」(日本版『PLAYBOY』85年4月号, 『馬車は走る』[文藝春秋, 86])に拠ると、又「治勲は、なおへぼだね。これは一生ダメかもしれない。つまり、思想が低いんだよ。わたしのことを、あいつは親のように思ってるんですよ。わたしも、どのくらいかわいがったかわからない。しかし、あいつは思想が低い」と喋り捲った。趙治勲は1975年のプロ十傑戦優勝(初の公式戦優勝)で選手権獲得の最年少記録を作り、更に翌年の王座獲得に由る7大棋戦優勝の最年少記録(20歳5ヵ月)で注目を浴びたが、八段昇進(78)の直前に週刊誌に踊り出た秀行のこの「暴評」(「暴言」に擬えた造語)は、18歳の趙から名人獲得の自信を聞いた沢木には趙にとって絶望的な宣告の様に思えた。一生駄目の予言を嘲笑うかの様に趙は1981年に選手

権史上4人目の名人本因坊と成り、坂田栄男の次にこの栄光を得た若輩が3人とも秀行に「へぼ」と視られた事は奇妙である。秀行は1976年の八強争覇戦決勝で趙に1-2で負けた事が有るにも関わらず見下していたが、皮肉にも彼は83年の第7期棋聖位決戦の3連勝後4連敗で趙の大3冠達成を手伝った。

藤沢秀行は『碁打ち一代』(読売新聞社, 1981) 第十七(終)章「棋聖」の中で、「将棋の大本山」日本将棋連盟(27年成立)では駒音の響きの聞かぬ日は有っても石音の聞えぬ日は無いと書いた。将棋指しの碁好きの代表としてアマ十傑戦の神奈川県代表だった河口俊彦が挙げられるが、河口著『人生の棋譜 この一局』(新潮社, 1996)の冒頭の「一九八九年」の第1篇「手を渡す」に曰く、「大山康晴が得意とする将棋術の一つに、手渡し戦法がある。敵玉を寄せに行くべきか、あるいは白玉の受けに回るべきか、の切迫した場面で、それ以外の手、関係のない駒を取ったり、遊んでいる駒を動かしたりする。一回パスするから、好きなように指してみる、というわけだ。/もちろん、簡単につぶされる手があればすぐ負ける。それが無いことは読んであるのだが、でも、読んでない好手を指されるのではないか、の恐怖心がある。また、理屈からは、一回パスするより、敵玉に迫るなり、一手先回りして受けた方が勝ることが明らかだ。相手も、どちらを選ぶか息を詰めて待っている。/そこで気の抜けたような手を指されると、瞬間、ありがたい、とホッとすると、ところが、具体的にどう指すか、となると決め手がない。なにかあるはずだ、あるに違いない、の強迫観念が昂じ、ついに自爆に等しい手を指してしまうのである。/そういった大山の勝負術は、みんなよく知っている。しかし真似できない。手を渡した瞬間は、相手に死活をにぎられている。いってみれば死線をさまよっている有様で、そこに身をおく度胸がないのである。/呉清源九段は“自分から打っていい手がないときは、相手から打ってもいい手がないはずだ、だから手を抜け”と言っているが、大山の考え方と同じである。どうやら勝負の天才は、根っから人を見下しているようなところがある。」呉とは公言するかしないかの違いこそ有れ**同格の敵手を見下す姿勢は勝負師の証**であり、実際にも秀行は棋聖防衛戦で林海峰を2回、石田芳夫・大竹英雄を各1回撃退した。

『激闘譜 第一期棋聖決定七番勝負 藤沢秀行 VS 橋本宇太郎』第4局([先番]橋本対藤沢, 278手完, 白5目半勝ち)の第11譜(142~143)の解説「へボの碁」に、「藤沢九段が上辺で二十目近くの損をしたところで、解説の呉清源九段と一緒に、控室でこの碁をつついている立ち会いの高川格九段が“へボの碁はわからん”とつぶやき、呉九段は“全くだね”と応じたので、部屋はドッとわいた」と有る。大竹英雄が中国の棋士に薦めた「高川+藤沢」複合の理想を思い起せば実に愉快であるが、件の「超<sup>くだり</sup>大烈<sup>〔ママ〕</sup>一流の云い方」を振<sup>もじ</sup>って言えば高川・呉の超一流の云い方と理解できよう。超一流陣を斬った秀行も先輩から「へボ」と評されたので高手の上にも高手が居るわけで、唯一誰も軽視できない呉の絶対的な強さは正に神に近い至高の地位を占めていたのである。群雄割拠<sup>かっきょ</sup>の黄金期に諸強豪から其処まで神格化された事は人類棋史

の一大奇観と言えが、人間界の「碁神」でも天界の神でない以上「低級錯誤」も犯す宿命から逃れる事が出来ない。

中国の中型国語辞典の中で『広辞苑』並みに権威度が群を抜く『現代漢語詞典』に於いては、聶衛平の回想録・打碁集の和訳作業当時の第1・2版（丁声樹 [1909～89, 言語学者] 主編, 中国社会科学院語言研究所編, 商務印書館, 1978・83）では「臭碁」は採録されておらず、文化的な生活の一部である頭脳競技も抑圧された「文革」の影響は概念への理解にも及ぼした。第7版（同研究所詞典編輯室編, 2016）では「碁」（**圍碁**・**象碁**・**西洋将碁**等）の空前の隆盛を反映して【臭碁】の項が有り、語釈は「**圍碁**時拙劣の着数；拙劣的碁術」（**圍碁**を行<sup>や</sup>る時の拙<sup>す</sup>い着手。碁の拙劣な技倆）と為るが、字・義の両面で最も合致する日本語として已に死語化した「拙碁」が思い当る。和製漢語か否かも不明の儘と為る「拙碁」は『日本国語大辞典』でも立項されていないが、【**笨碁**】の用例（3点）の初出「俚言集覽（1797頃）“ざる碁，拙碁を云ふ”」に見える。次の「酒中日記（1902）〈国木田独歩〉五月八日“出張所の代珍，派出所の巡查など五六名の者は笨碁（ザルゴ）の仲間で”」「牡丹雪（1930）〈嘉村磯多〉“互に毒舌を浴びせ合ひ乍ら笨碁（ザルゴ）を囲んだ”」から、20世紀前半の日本の脱中国語の傾向（「碁」→「碁」の用字）と**愛碁家の多さ**を窺わせる。井山裕太の師匠の師匠に当たる細川千仞（1899～1974, 58年八段, 71年引退・九段贈位）は、51～54年に初級者向けの碁誌『ざる碁』36冊を刊行し普及活動に個性的な貢献をしたが、日本棋院関西総本部の重鎮の豪放な碁風に似合う荒っぽい命名は「笨＝初級」の1例に為る。「笨碁」は『広辞苑』で「笨造りの碁筭碁筭に土製の白石・黒石を用いることから、また、笨の目のあらいようにあらい碁という意から）**圍碁**のへたなこと。また、その人」と説明されているが、『日本国語大辞典』の語釈は「（“ざる”では細かいものがもれるということから）へたな碁。幼稚な碁を打つこと。また、その人。へりくだって自分の碁をいう場合もある」とし、**補注**で「碁石はもと非常に小さく、小形の箕（み）を石の入れもの（碁筭）に使っていたが、技量の未熟な人や趣味の深くない人は、泥石（土を固めた石）に目のあらい笨を用いることが多かったところからともいわれる」との説を紹介している。【笨】の「④“ざるご（笨碁）”の略」の前に「②（比喩的に）大ざっぱで抜けた所の多いものの意」と有り、「この校正はざるだ」という用例は異例にも出処が無く執筆者が実感に即して作ったらしい。『広辞苑』の同項目では「②笨碁ざるの略」の後の④が「漏れの多いことのたとえ」で、例文の「何度やっても一だ」は「**校書掃塵**」と**照らせば校正乃至碁の読みの定めと繋がる**。この四字熟語の項で参照を指示された【**書を校する塵を掃うが如し**】は、「[夢溪筆談雑誌二] 書物の校正は、その度ごとに誤脱などが発見され、いくら塵を払っても払い尽せないように、完全無欠を期することは至難である。校書掃塵」の意味である。中国の法規では書籍中の誤植が1万分の1を超えると不良品として回収せねばならぬ（国家新聞 [報道] 出版総署 [局] が定めた「図書質量 [品質] 管理規定」[2005.3.1 実施] では、編集・校正の合



格基準は「差錯〔錯誤〕率」が1万分の1以下とし、過失が1~5/10000の場合は回収後の訂正本発行が可能で、5/10000超では不可と為る)が、**囲碁では正解発見の困難や点検時間の不足の所為でその許容限度の「万一」にも届き難い。**

## 附記

本稿は夏剛・夏冰共著「囲碁の“酷”と人智の“魔”——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工知能4強の特質・行方(1~3)」(『立命館国際研究』29巻1~3号, 2016年6月・10月, 17年2月)・「相克相生と栄枯盛衰——国際化・人工知能制覇時代の囲碁の変容と不易(1)」(同30巻2号, 17年10月)の**進化版・決定版**であり、両論考の一部の内容・表現・見解を活用・敷衍し且つ発展・昇華させた処がある。

本稿では**多くの文献・著述者等を紹介する意図**に由り、出処の基本情報を文中に盛り込む形式を基本とする。特に章・節又は局・譜等の所在を示した場合、煩雑を避ける為に注で頁を記す事を省く。

**猶、後に棋戦・棋士・棋史等の論考で展開する予定**の一部の内容の出処も、初出時には略し以下の詳述で文中に明記する。例えば「馬曉春(1964~ , 83年九段[4人目])は藤沢秀行が世界No.2の碁才の持主と推し、次の劉小光(1960~ , 88年九段)は日本でも少ない趙治勲(1956~ , 81年九段)と互角に近く戦える実力者として秀行に絶賛された」の件は、「ウィキペディア フリー百科事典」日本語版の「馬曉春」「劉小光」の項にも、「藤沢秀行は馬が若い頃からその才能に注目し、“1に曹薰鉉, 2に馬曉春”と評した」、「藤沢秀行に“趙さん(趙治勲)にこれだけ打てる棋士は日本にもぎらにない”と言わしめ」と有る(2018年1月11日再確認, 本稿連載1中の**電腦網情報**の最終閲覧日は同じ)。何れも出典未記載の2点は前者が藤沢秀行『勝負と芸——わが囲碁の道』118頁の「馬さんは六, 七年前から, “一にクンゲン, 二に馬”と私が口ぐせのようにその才能を高く評価していた棋士である」、後者が『1989年版・囲碁年鑑』(『棋道』5月臨時増刊号)289頁の「第1回日中天元戦/趙, 連勝で劉を制す」(高林讓司)に見えるが、当該部分は後に藤沢一馬の対局・関係, 日中天元戦第1局の握りの場面に関する論述で**大寫**したい。

## 注

- 1) 東京都知事選で歴史観・国家観に近い軍事評論家・政治活動家田母神俊雄(1948~ )候補を応援する演説にて(「NHK経営委員が選挙応援/百田氏, 演説で歴史・憲法観/東京都知事選/政治活動“立場を無視”識者」, 『朝日新聞』2014年2月4日)。田母神は2008年に政府見解と異なる史観の論文を発表した事で防衛省航空幕僚長・空将を解任され, 今回の落選後16年4月14日に公職選挙法違反の疑いで東京地方検察庁特別捜査部に逮捕され, 翌年5月22日に東京地方裁判所より懲役1年10月・執行猶予5年の有罪判決が下された。
- 2) 「NHK経営委員の南京大屠殺否定発言を批判 中国外交部報道官」, 中華人民共和国駐日大使館サイト(www.china-embassy.or.jp), 2014年2月5日; 「日本広播協会経営委員否認南京大屠殺/日本輿論認為応該追究首相任命責任」(東京・劉軍国記者), 『人民日報』同日; 「否認南京大屠殺, NHK経営委員再遭批判/中方嚴肅敦促日本正視和深刻反省侵略歷史」(北京・東京・首爾・華盛頓 吳樂瑒・劉軍田・万宇・李博雅記者), 同紙6日; 「日本媒体發表社論/批判NHK経営委員否認南京大屠殺」(東京・劉軍国記者), 同紙7日。
- 3) 「2017全国業余棋王爭霸賽」(qw.bianfeng.com/articleDetail?id=178)より, 出処は「辺鋒集団官網」(www.bianfeng.com)と為り初出日は未記載。

- 4) 「票友級規則大師陳祖源 曾修訂世界智運會圍棋規則」(記者門天清・通訊員張瑞林),「新浪競技風暴網」(<http://sports.sina.com.cn>) 2009年5月3日,『楚天都市報』より転載。
- 5) 張大勇「江南欲戰幾何」,『圍棋天地』(中国圍棋協會・中国体育報業總社,月2回刊)2016年第2期(号),7~8頁。
- 6) 「柯潔優勝/阿含・桐山杯日中決戦/若き王者 2度目のV/河野 決め手を欠く/コウの連打小さく/柯潔 見損じも挽回」(本紙・上田篤史),『週刊碁』(日本棋院機関紙)2016年12月26日号。
- 7) 「万寿無疆」を「无寿无疆」と誤記した故「反革命現行」にされた事は後年に多く明るみに出ており,『人民日報』の誤植事件に関する記述は本稿執筆中の2018年1月下旬にも<sup>ネ</sup>電<sup>ブ</sup>腦<sup>ト</sup>網<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>で再度閲覧したが,脱稿直前の2月7日に注で出処を記載する為に最終確認をした時には忽然と蒸発していた。歴史の暗部に触れる表現がどんどん消されて行く直近の中国の動きに起因したなら残念に思うが,文献の基本情報が現時点で掴めなくなった当初保存した当該部分の原文を掲げて置く。「“文革”時,在人民日報还发生了“无寿无疆”事件,排字工人把毛主席万寿无疆,错排成了无寿无疆。排字工人排错字是常有的事,但这次那位工人成了现行反革命。」「记不得具体日期是哪一天,在一篇文章中有一句“祝伟大领袖毛主席万寿无疆”,工厂一位女排字工把“万”字排成“无”字,几个校对和夜班编辑部都没有校出来,结果这句话成了“祝伟大领袖毛主席无寿无疆”。这还了得!“革命群众”马上把唐平铸揪出来批斗了一通,责骂他“故意侮辱伟大领袖”。」(唐平铸は「文革」初期の『人民日報』総編集長代理)上記の文中の太字は検索条件に適合した部分であり,「人民日報」「万寿无疆」「无寿无疆」の3語で検索した処,『青島日報』刊登《我们的检讨》,就1月31日在《青島日報》第1版将“万寿无疆”错印成“无寿无疆”,“作深刻的检讨”も出たが,「青島“文革”大事記」(?)の1967年の部分に有るこの件も脱稿前の最終確認では辿り着けなくなった。<sup>ネ</sup>電<sup>ブ</sup>腦<sup>ト</sup>網<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>の情報「忘れられる権利」の適用が難しい日本では想像し難い事態であるが,上記文献の復帰を期待しつつ今後「平和<sup>フ</sup>惚<sup>ケ</sup>け」の教訓として活かして行きたい。
- 8) 「温家宝事件:温家宝指示不要处理人民日报相关人员」,博訊網([www.boxun.com](http://www.boxun.com))2011年1月13日,香港『大公報』12日の報道に拠る。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

## 相克相生与深奥幽玄——围棋、棋史之情理及妙趣 (1)

本文是前作《围棋之“酷”与人智之“魔”——顶级智力竞技的原理及中、韩、日、人工智能4强的特质、走向(1~3)》(本刊第29卷1~3号)、《相克相生与荣枯盛衰——国际化、人工智能称雄时代中围棋的演变及恒常(1)》(本刊第30卷2号)的升级版及终极版(因而有部分内容、见解、表述活用了前作并予以展开)。

本部分首先着眼于围棋史上两大黄金期(日本江户、昭和时代)及新纪元(人工智能时代),从探讨起源的通说、异说入手,比较“生母”中国和“养母”日本的思维、棋风等的差异(如日本围棋的美形、厚实、稳健、淡泊对中国围棋的奔放、豪迈、过激、贪欲),及棋战中文化、国民性的差异、冲突。指出20世纪后半主流由“拼命”转向“平明”并迎来国际化时代,关注不同棋风融合的课题。

将棋手的故事视为棋史的基轴,寻求高手的事关围棋观、人生观的信念、气势,展示围棋王国青、壮、老代表的争霸欲望和大家风范。同时通过比赛中“校书扫尘”般不可避免的失误,指出这一顶级智力游戏的深奥莫测。

(夏 刚,立命馆大学国际关系学院教授)

(夏 冰,京都围棋道场教师)

